

終戦・抑留・引揚

私の戦争体験

水野恭子（四七）

私は昭和十九年生れ、自分自身が戦争体験をしたのではないのですが、満州からの引揚者として、母の苦労や両親の苦勞を思うとき、どうしても書いておきたいと思いつきました。戦争は、戦場で夫や息子を失った悲しみの他にも、いろいろな苦しみ、悲しみをもっています。私は今も残留孤児のニュースや新聞報道をみる時、人ごとと思えないくらい悲しい気持ちになります。母はなかなか口に出して言わなかったのですが、私が少しずつ聞きだすとポツリポツリと語ってくれました。

私は昭和二十年九月、一歳半の時に奉天から博多港に引揚げてきました。当時は栄養失調で病弱な私は、病人ばかりの船に母と一緒に帰ってきたそうです。父は別の船で帰ってきましたが、その時代は政局不安定で、いつ、船は沈没するかわからないというのが、当時の実状で母は毎日博多港へ私をおぶって迎えに行っていたと言います。

その母の思いを思うと本当に胸が苦しくなります。やっと会えて三人の家族は、貧しい中にも心豊かな生活でした。着のみのまま、何もありません、親戚の家にお世話になり、その後、引揚者住宅で暮らししました。その住宅ときたら、バラック建ての床は薄い板一枚で、その上にゴザが引いてありました。トイレも共同便所でした。しかし、引揚者住宅の人達は皆いい人ばかりで、畑をしたり、にわとりを飼ったりして、私は結構、楽しく過ごしていました。しかしわが家の生活は大変で親類から着物と交換に、野菜やお米をもらいに長い汽車に乗り、また長い距離を歩いて荷物をもら

って帰ったのを覚えています。

ところで父は軍属として中国に渡ったので、比較的早く日本へ帰ることが出来たのですが、今、残留孤児と言われている人々は、満州開拓団等で、行かれた人達だそうです。日本の政府は、戦争が終ったにもかかわらず、少しの船しか出さずに多くの人達が帰れずに残ったのだと聞きました。お国の為とまじめに働いていた人達を無残に扱う日本政府に本当に腹立たしく思います。

今、また、自衛隊の海外派兵が平気で、自民党の口から言われています。私は本当にこわい事だと思います。自衛隊が海外へ派兵するような事になれば、まず国家公務員その付随する仕事で民間の労働者も行く事になります。私はどうしても許してはならないと思います。

私が中学校で社会を勉強した時、母に「何故大人は戦争に反対しなかったの」とよく聞きました。母は「そんなもの言えるような世の中じゃなかったもん」と母

は言いました。今はあの時と違います。戦争反対、平和憲法守れ、自衛隊の海外派兵反対を大きく叫べようではありませんか。私達の子供の為にも!!

(大住ヶ丘在住)



戦後44年に舞鶴市に慰霊碑が建立。戦争の傷跡は今なお消えない。

青いみかんの思い出

大浦 明 美(五)

毎日放送テレビ「万里の長城」を観る。瀋陽・鴨緑江など懐かしい字が、響きがきこえる。横にいる夫や娘にその地図を指して「私ここからここまで歩いたのヨ。」と話しかける。「フーン」二人共それだけ…。この間まで引揚げの思い出話の相手だった母もこの三月他界してしまった。

電灯もラジオも、もちろんTVもない今の世の中からは想像も出来ない、でも海産物の豊富なのんびりした庄河という北満の田舎町で私の八月十五日は来た。国民学校三年生であった。その夜からその生活は一変

する。日本からその町の警察に派遣されていた父は機密書類等を一晚中、前庭で燃していた。

明けて八月十六日から、満人の襲撃がはまり台所の板一枚まで、略奪されてしまった。日本人に抑圧されていたものが、一気に吹き出した光景であった。

しばらくして何故か私達は、大連に近い小さな町の小学校の講堂で共同生活をしていた。そこには毎夜、ソ連兵が、若い女をあさりに来た。女の人は、すみを顔にぬり、腰をかがめて、老人のふりをして難をのがれていた。やがて、それぞれにジャンクという塩運びの小舟をチャーターして、各地に散っていった。私達は、渡満した最初の土地・アカシア並木の美しかった安東という町に、逃げのびた。住居は安東旅館、旅館とは名ばかりの今でいう木造アパートであった。ここで父は身分をかくし、全員が偽名を作り、ひっそりとした売り食いの生活をする。ショールウを売りに出る父、たばこ工場でたばこを巻いたり塩味の大福餅を売りに出た母と私、そんな生活が数ヶ月続いたある日、全員

が競馬場に連行された。そこで身元の割れた父が、数丁の機関銃にとりまかれてしまった。そしてまさにそれが火を吹かんとした時、人ごみの中から現れた中国人の「この人悪い人じゃないヨ。」という一言で一命をとりとめたのである。競馬場の馬小屋でふるえていた私達は、この話を戻って来た父からきかされた。

やがてこの場所から十里四方追放の命が出た。寒風吹きすさぶ二月のある日、トウサンジョーという所の遠い親類を頼り馬車での逃避行がはじまった。

ここでの生活は、半年余りだったろうか、農業の手伝いをしたり、割とのんびりした日々をすごした。

そして夏もすぎようとしたある日、帰国命令が出た。が、戦火でズタズタになった村々には、交通機関は皆無であった。私達集団は、線路伝いに山を越え河の中を渡り、一日三十キロ余りを行軍する。一週間余りのその間には、道端に捨てられて、中国の土となった人も少なくない。京都（中国の）金せい・奉天・コロ島・この道中が、引揚げる時の私の一番苦しい思い

出のように思われる。

奉天でのある日の夕方、井戸のそばで立ち話でもしていたのか母があわててもどって来た。「おにぎり十個と娘さを替えてといわれたヨ。」その頃日本人の娘は、評判がよかつたらしい。もしその時中国人に貰われていれば、今頃、中国残留孤児として、新聞に出ていたかも知れない。

コロ島で船に乗った時はさすがにほっとした。博多までは一週間であったが、船に、チフスが発生し、上陸まではなかなかであった。

昭和二十一年十一月も末のことであった。中国の冬は雪は少ないが、零下四〇度にもなり凍土の世界である。博多湾から眺めた日本の山々の濃い緑、船内で配られたまだ少し青みの残った日本のみかん。その新鮮さは、今も青いみかんの季節になると、博多のあの日に帰る思いがする。

（花住坂在住）

旧満州開拓移民の悲惨な引揚げ

松村 敏雄（函）

私は、昭和十四年、小学校六年生の春に、父が南満州鉄道に水道技術員として派遣されたことにより、ウラジオストクにほど近い、豆満江に接する町、会寧の地に赴き、ここに住居を定めた。そして、終戦の昭和二十年八月まで過ごした。

私も満鉄（後に朝鮮総督府交通局となった）に籍を置いていた関係から、終戦時には、鉄道整備の目的とで残留を余儀なくされた。終戦から日本内地へ引揚げまでの間の見聞したことを綴ることとした。

一、日本の敗戦によるソ連軍の満州から北朝鮮への進

駐

八月十日前後と思うが、山越えに港町が、さかんに燃える様子が見えた、あとでわかったことだが、ソ連軍が艦砲射撃で町を焼いていたとのことであった。確かな情報が入手できないまま、八月十四日と記憶するが、とりあえず客車、貨車を動員して、すべての日本人は南下することにした。

八月二十五日頃には、北緯三十八度国境線が設けられたことを知った。何ら為すこともない我々青年鉄道警備員も、一度は三十八度線突破を試みたが、国境に立つソ連軍歩哨に手向いもならず、また北の町、威興に戻った。

二、旧満州（現中国東北部）から多くの日本人の南下
元満州開拓移民の家族が続々と南下して来て、威興周辺の元遊廓や元日本人小学校の教室にゴザを敷いて起居していた。私もこの中の一人であった。食糧といえば、どこから配給されたのか大豆ばかりの飯で下痢ばかりした。この大豆も欠乏し、寒さと飢えと、シラ

ミが媒介する伝染病の発疹チフス等で、バタバタと死
人が続出した。暖かい日に山に大きい穴を掘っておき、
藁で巻いて大八車に積み重ね運んでいた。

最悪であったのは、娘さんといわず、人妻といわず、
女とみれば、昼夜の別なく、ソ連兵は銃で嚇して連れ
て行く。消炭で顔を黒く塗っても駄目だった。時計や
万年筆は、強引に、むしり取られた。ソ連兵の悪いこ
とといったら例えようもなかった。

当時、私は同じ鉄道員仲間と現地人の作男として住
込み、稲刈り、山仕事をして、かろうじて飢えを凌い
だ。

三、日本内地（我々は故郷日本の地を内地と呼んでい
た）へ帰りたいと望む日本人を何故零下三〇度にも達
する寒冷の地に留め置いたのか

ソ連軍令部の意図はわからない。

四、残留日本人の悲痛を思う

今も中国東北部に残留の日本人が数知れず望郷の念
断ち難く暮らしておられるのを報道で知る。難を逃れ

て南下する途中、足手まといの幼ない我が子を一人、
二人と涙ながらに現地の人に渡し、自らも南下しなが
ら内地に帰り着くまでに飢えと病に倒れ、尊い命を異
郷の地におとし、何とも例えようのない悲惨さである。
五、戦争の悲惨さ

何の罪もない一般民間人を多数犠牲にした日支事変
に引続く大東亜戦争、満州開拓移民として多くの日本
人が寒冷の地で鋤鋤をふるい祖国日本のためと念じて
働き続けた同胞の悲惨を思うとき、戦争は繰返しては
ならないとつくづく思う。

終戦の翌二十一年六月初旬、せめて病人だけでも日
本へ送還させてやってほしいという日本人世話会の要
望をソ連軍令部が聞きとどけたのか、我々元氣な者が
藁と竹で担架を作り病人を担ぎ貨車に乗せ、幅四キロ
メートルといわれた山中三十八度線を徒歩で、やっと
の思いで越え、南朝鮮の注文津チウムジンから山口県仙崎港に辿
り着いたのが六月末であった。

（田辺在住）

願意世界的平和

高橋 貞一（七七）

昭和二十一年十月二十五日、私は生家に通じるせま
い上り坂の道に来て、ホット一息立止まって家の方を
見上げた。そこには一人の老人が半ば口をあけ、なに
か不思議なものでも見るような顔をしてこちらを凝視
していた。言葉はない。出そうとしても出ないのかも
しれない。私の後についてきているのは、リュックサ
ックを負った六歳の長男、小さな包みをぶら下げた三
歳の長女、そして生後七か月の女兒を胸にくくりつけ、
背中にリュックを負った妻、勿論私も背中には手縫い
の大きなリュックを背負い、両手にはボロで包んだ荷

物をさげている。そしてみんな汚れている。私もそれ
が親父とわかっていてもすぐに言葉はでない。勿論長男も
長女もそれが誰なのか解る筈もない……。

そんな生家への第一歩だった。九月十日旧満州のC
市を出て以来、四十六日目、斃れずによく帰ってこら
れたものだ。だが実際には感激も実感もない。頭の中
は真空状態で、そのあと何をどう喋ったのかも記憶に
はない。とも角一刻も早く畳の上で寝たかったことだ
けは覚えている。

※ ※

ここで線路は破壊されている。これ以上進むことは
できない。無蓋車から全員降りる。誰の顔も煤煙で真
黒だ。一応揃ったところで徒步行進だ。小学校六年生
くらいの女の子が背中に赤ん坊を背負っている。その子
が「オジチャン一寸赤ちゃんを見てやって」という。
よしよしとすっぽり被われたネンネコをめくりあげて、
のぞいて見てアッと息をのんだ。赤ちゃんは目を開け
たまま、その目の中には埃がたまっていたままで、既に息

をひきとっているのだ。瞬間ネンネコを元にもどし、そのことを告げることもできず、ハイヨシヨシと声を掛けて、さあ元氣を出して歩こうねと、ネンネコの背を軽くポンポンとたたいてやった。冥目……。

横抱きにぶらさげるような格好で、長女をつかまえて歩いていく。ふと長女の身体から力が抜けたような感じに驚いて、立止まり抱き上げてみると、顔面蒼白、気絶寸前である。だが死なしてはいけない、とも角も生きて日本に帰らねばならぬ何も要らぬ、生かしてほしい。どこまで歩くのか、行列は延々と続く。

※ ※

女や子供を中にして男達が周囲をとりまいた形で野宿。九月の満州の夜はもう寒い。そしてやけに星が美しい。今宵はどんな夢を見て眠れるか。日本の空はまだ遠い。この行進の途中で亡くなった子供達の土葬……誰も一言の言葉もない。そして涙も出ない。ひたすら何かに祈るだけ。

※ ※

如く捨てられてしまった過去の現実である。

再び訪れる人無き畠野の土に埋められた子供達、更に自分の手で命を断った大人、ようやくに故国に帰る船に乗ったのにその船の中で死に水葬にされた人達、そしてその遺族、みんな名もなき庶民である。今こそ声を大にして生命の尊厳と平和を訴えたいと思う。

(三山木在住)

開拓団の基地を出る時は、百十何名かだった。それがC市にたどりついたのは、たったの三名だけ。との報告を聴いた。これはひどい。日本人会としても、どうすることもできない。切歯扼腕するのみ。国策と云う名のもとに、そして置き去りにされたこの悲劇……嗚呼……。

ここで一つ思い出した。当時友人であつた中国人の王君が、いよいよ私達が引揚げの直前、かくれるようにして訪れ、言つた言葉「丁さんあなたは戦争に負けたというけど帰れる国が、家があるじゃないか、私にはそれがない」と。

ともあれ戦争は文字通り悲惨である。もっともっと深刻な例は幾らでもある。絶対にやってはいけないのである。それは大抵の場合何かの名目をつけて、しかもある特定の権威または権力者によって実行され、無知の庶民はその大義名分に協力するという形で強制力に支配され、結局犠牲にされるのである。尊い人間としての生命すら護国という言葉によって、一片の紙の



中国新香訪の墓への慰霊。

私の満州引揚体験

安達 輝(八二)

昭和二十年五月二十八日福知山市天座から親子六人で、満州三江省依蘭県第二天田開拓団に入植しました。主人も甲種合格であり、入植後四十日目、現地召集でソ連の方へ行ったと聞きました。列車の中で一本の煙草も分け合うたと帰った人に聞きました。何日経っても音信不通、ただ生命あるように神仏にお祈りしました。心配ばかりの毎日です。

無条件降伏したのが十五日で、一家の柱を戦場に召された後、残された母子言葉に表せない苦難の毎日でした。団員一同ぬかるみの三里程歩き続け、婦女子や

男の人は、四人位。行列よりはなれたら、荷物は持ってやると満人に取られました。コーランの畑の中より兵隊さんが三人来て下さって、B 29が飛んでいるので一足早く、埠頭へ行きなさいと。着くと、もう日も暮れ、早く船に乗るように。乗って見れば、二個中隊の兵隊さんが船底へかくしてくれました。松花江をハルビンへ船は進みます。方正し通河開一番治安の悪い所で、夜十時から翌朝三時頃まで匪賊の襲撃に出合い、船の底も穴があき水がいれば沈んで、全員水死していたでしょう。こわい目に遇いました。御飯は白いおにぎり、金平糖入りのカンパンを頂き命は助かりました。あの美味しかったことは今もわすれられません。

私が兵隊さんに、子供が行くについてお礼に行きましたら、自分達は、大方九州からのお方、自分も同じ年頃の子供がいる。子供を見る度に我が子のように思います。明日は一緒にハルビンの埠頭へ上陸、お別れに兵隊様のおかげです、とお礼を申しました。道の真中へ二個中隊、兵隊さんお別れです、どちらへと尋

ねます。鉄棒を四本組合せ置いて山奥へ行くと申されました。休みの間に私の子供の頭を刈っていましたら僕達も散髪をするので貸して下さいといわれ交替にしてお立ちになりました。私は塩の倉庫に「あんべら」をしいて毛布を一枚ずつ頂き一夜を明かしました。

そんな関係で平成二年シンガポールに一週間山下大將ほか堂守様がおられますので、教えて頂きお参りをしました。平成三年には沖繩へ三泊で皆様の御冥福をお祈りに京都府遺族会婦人部の皆様と行って来ました。私の主人は、シベリアアムール州ロストフカ地区第一分所で戦病死ということが昭和三十四年の最後の調査で分かりました。この日は十月七日、主人の誕生日です。草葉のかげよりお祀りをしてくれと教えてくれたと思います。

また思い出ですが、昭和二十三年に舞鶴埠頭に上陸された四国の松山様に、京都まで来て頂きました。十一年間わからないのは、府の調査が不十分であったことを私は民生部長様に腹を立てて申しました。十月七

日、消息のわかった日、昭和六十年は全国引揚者会合が舞鶴であり一泊、六十四年は、舞鶴交化会館が十月に竣工し、参加させて頂きました。六十年会合の時はNHKより連絡を頂き、岸壁の妻として二人で港までタクシーで旅館まで迎へに来て下さった。私達もうれし泣きでした。船がつくと田端ハナ先生が一そう舟が日の丸小はたでお迎え頂きました。「只今帰りました」と大きな声で泣いてばかりでした。

△新香訪から帰えるまで▽

敗戦による引揚者は、全国で何千何万人といいますが、現地で築いた財産は中国人にとられ、裸一貫で引き揚げました。食事も朝夕なんば粉のおじやで私たち五人で、はんごう一つ半しかないのです。この様子ですので栄養失調になって、一日に四十人ぐらい故人となられました。私も使役で毎日お墓まで運んでまいりました。私も自分の子供が指をくわえて見えています。お金なし自分もたべるのをひかえ、子供(一年生と三年生)たちにはたべるものがほしければ満人の子供に

行くか、死んでしまえと申しましたくらいです。人様のためには何でも寮長の命令で薪の運搬、男の人の中へ主人の服を着てゲートルを巻き作業に行きました。あくる日女がまじっている。明日からはあぶないから休むように言われました。十人ぐらい泊りがけで、クリーに行きましたが、あの時のお金は一日五十円。そのお金は総本部、区本部、自分の頂くのは十五円。子供に一度お腹一ぱいたべさせてやりたいと思いました。たが足りません。四月には雪がとけ、草が芽をふきます。いろいろの草をとりに行き満人の家へ木綿の布とお味噌を交換に行き、ゆでてごはん替りにしました。塩の食倉を出て、ハルビンの中学校で約一か月。三江省だけの集りです。女の人も髪は坊主頭で、歩いておられます。死人が多く、学校の広場も埋める所もなく、北満一の義勇隊の訓練所一区より十六区まで百人寮が六十四人ほどありましたので、そこへ変りました。山手の方へとソ連の大きな自動車に乗り、新香訪の収容所で、一年四か月お世話になりました。内地へ

帰える話を聞きました。夏は暑いし、寒さはきびしく、着るものもなく、毎晩あちらこちらより寒いとさけび声、今日あって明日はない身体です。私も何とか子供と五人で帰ったのも、福知山では私一人、今でも残留孤児が来られますが、娘があの時置いておかれたら「探しにかへらなければならなかったな」と言って話します。この島より一週間、しけの中で船はゆれ、すわることも出来ず、九州の南風岬へ上陸しました。もう戦争はいやです。平和な日本が続きますよう。故人の方々のめい福をお祈り申し上げます。合掌。

(三山木在住)

戦争はもう、ごめんだ！

中川 久一 (七二)

昭和十七年四月から二十年十一月まで、フィリピンのルソン島及びミンダナオ島に三年と八か月戦争のため駐留していましたが、敗戦のため帰国（捕虜となつて）したのです。その間、色々の事に遭遇致しましたが、特に平和として強い関心を持っていたのは、戦争現地の住民ではないかと思ひます。フィリピンはその当時、アメリカ合衆国の植民地でありましたが、日本が南方資源を望むにより、フィリピンへ侵攻、そのためやむを得ず受けて立ったもので、アメリカ軍と日本軍の戦いであり、フィリピンの住民には関係のなかつ

たものと思います。

しかし戦争のため一番の被害者は現住民であつたと思います。その戦争のため肉親は銃撃や爆撃のために、その弾に当って死亡し、難を逃れるため右往左往とさまよい歩き、肉親とは離ればなれになって逃げるのに精一杯で、食料も満足にとることのできない状態。またそのほかいろいろの苦勞の連続で現住民としては筆舌に云い表せない事態の連続であつたと思ひます。戦争さえなければ、このような事態に巻き込まれることなく、平和に暮らせていたものと思えば住民としては耐え難いことではなかつたかと思ひます。

このようなことは、ほんの一例に過ぎませんが、その他もつと悲惨な事も沢山あつたのではないかと思ひます。私達軍人も敵の攻撃のはげしさと、それに対抗する武器もなく更に食料も欠乏の連続で、後退後退と、結局山の中に追い込まれ、食べるものもなく、犬、猿、猫、ねずみ、とかげなどを食べられるのはすべて食べた。それも底をつき結局、木の根、木の葉をあさつ

ていたが、塩がないため身体の疲労が増すばかりで、この上は敵の軍門に降るしかないと思い、降服したものであります。悲しとも仕方がなかったものです。沢山の戦友は食べるものもなく戦傷のため、病のため「天皇陛下下の御為に」亡くなって行ったものは数知れず、悲しい現状でありました。戦争さえなければこのような苦しみもせずに済んだものです。フィリピンの現住民も楽しく暮らせたものと思います。

いずれにしても「平和」であってこそ人生の生き甲斐があるのではないでしょうか。もう戦争は御免だ。何時までも平和で楽しい社会であるように、願うのは私一人ではないと思います。おたがいに平和を築いて行くことはありませんか。

(三山木在住)

わたしの戦争。抑留生活体験

小西 勇 治 (七二)

私は昭和十八年十一月一日、第一乙種にて兵庫県青野ヶ原中部第四九部隊へ入隊。一週間くらいだったと思うが、満州の斐徳戦車第十一連隊第三中隊へ転属した。特に戦車運転教練は頭をじ・や・ん・じ・や・ん・た・た・か・れ・落ちつかず、夢中だったことが忘れられない。

一期の検閲の終わった折、昭和十九年三月に動員命令が出て、何処へ行くのかわからない。貨車に乗って朝鮮の釜山へ着いたところ、暁部隊とわかり乗船待機。わが連隊は防寒具を返納せず、朝鮮海峡を渡り下関へ着き、それから外は絶対見られずに、着いた所が小樽

だった。二日ほどの民家宿営のあと、一か月程はパレット兵舎生活で乗船待ちのようだった。この時、補充兵が入隊して来て私たちは二年兵気分だった。乗船して「何処へ行くのやら」何日間ほど、乗船していたのやらおぼえていない。敵機偵察と飯上げ当番が廻って来るだけ、風呂に入れずシラミがわいて来て、シャツの裏の縫目に一面についている。暇の時にシラミ殺しだった。

昭和十九年五月頃と思われるが、着いた所が雪で真白、目がはちり、北極の感じで占守島シムナシマだった。向いの島が幌筵島マカサシマで占守島より大きく、九十一師団司令部があった。ここにも暁部隊の船舶兵の活躍が見られた。占守島は、縦、八里、横三里程と聞いていて、無人島で、ただ缶詰工場らしいものがあって、製造シーズンだけ、日本人が来て働き帰るらしい。日照時間が少く、夏でも三時以降は湿気と冷えて冬には人間が飛ばされるくらい突風が所によっては吹くという。半地下パレット兵舎へ入って五月、六月頃でも吹いた。野菜は

乾燥物ばかりで、栄養不良になる。飛行機は時にしか飛んでこない。戦車戦闘配置用壕掘りと演習で過ごした。アツツ島玉砕は閃聞していた。

昭和二十年八月十八日未明、占守島三領山の麓に戦車十一連隊は、対ソ戦闘配置につき、交戦したが、池田連隊長以下、陸士卒将校は、戦車より身体を出し戦死した。戦死者九十六名と発表されている。この時、敵機襲来、整備班は塹壕の中へ入り、ただ命あるを願うのみ。終戦の報にて残念で涙が出て魂が抜けたようだった。時に年令二十五歳。武装解除後、捕虜編成は旧日本軍の連隊、中隊、少隊そのままだったのでよかった。旧日本軍下士官以下で、将校はシベリアへつれて行かれたように聞いていた。作業は占守島より幌筈島で短期間、清掃雑役で、ノルマはなかった。草を缶詰の空缶で炊いて食べた。

その後樺太の珍内へつれて行かれ、森林伐採作業。ノルマがあったが、少年戦車兵の人と同じ組で助けてもらったようだった。バラック建宿舍で廻りは柵をめぐらし番兵が、マンドリン型銃を持って番をしている。雪積りは浅い方で、宿舎から伐採地迄は、二キロくらいだったと思われる。毎日ノルマ完遂で宿舎へ帰れるが、食がまずしく少いので涙が出た。楽しみは寝ることだった。人間の欲望はアウト、ただ生きる精神力のみ。あわ飯で湯吞茶碗一ぱいくらい、時には、黒パン一にぎりくらいだった。

一年くらい経過してから作業が替り、貨物船のハッチの中でトビを使って、イカダで貨物船まで着け、ウインチでつり上げて来た丸太を整然と置く作業であった。森林の伐採より面白味や楽しみがわいてきた。シベリアの抑留は、寒さと、食事と、作業ノルマ等がもつともつらく苦しいことだったと思う。栄養失調になり昭和二十三年六月二日に復員し舞鶴港へ着き家に帰った。こうした戦争と抑留生活の忍の体験をしたことをふりかえり、平和な生活の尊さを後世に伝えたいと思う。

(三山木在住)

捕虜として送られた時

小田 秀 一 (八四)

私は捕虜として奉天よりソ連に送られる、汽車の中で、知り合った人は抗突小尉でした。私に親切にして下さるので、仲良くなった。私もこの人を信頼して、私の食事半分をこの人に食べて戴いた。ソ連に着いた時、この人はロシア語が上手で、収容所長まで昇格された。立派な人でした。何かと私と話が合い、使役に出る時、必ずこの人に伝えて出た。職場でロシア人の奥さんが持っていたパンの半分を私にくれた。私は戦友に分けてやろうと、弁当箱に入れた。これを見たロシア軍人は賞罰とし手帖に書いた。悪行すれば、朝の

点呼の時に皆の前で発表され、犯罪人扱にされるところを少尉殿に報告した。「よし僕が何んとかする、心配するな。」と言って安心させて下さいました。この人はロシアの収容所長が信頼して業務計画表を作ったり、水道布設計画表や作業計画も指導するような重要な人でした。得意なロシア語で、私の事を逆に、褒めてロシア語で所長に話して下さったので罪を逃れました。この人は、収容所長に任命されました。私等の部隊は職務上明白にしない様に注意されました。

奉天で在郷軍人集まれの命令で、すぐ帰る積もりでかんかん帽子や麦ワラ帽子の人が集まった。ソ連軍隊が取り巻き帰さない。収容所に入れられ、軍服を着せられ我々と混合隊を作りました。一番最後でしたので、憲兵も混成隊で、汽車に乗り、飛びおりる人もありました。私は車輛長でした。一車を点呼して人がたりないと、食事が止ります。真黒な夜に飛ぶ、銃声が闇夜にひびく。無事に逃げたか心配。汽車は何も知らずに走る。混合部隊ですので、中々作業もむづかしい。仕

事はアライカントモラ。ヨロシタチスト。馬が十六いた。腹がへって、仕方ない。馬のところへ行けば、良いと、馬車に乗った。道の悪い雪の道を前の馬が走れば、走る。車は横になる。死物狂いだしがみつ。兵舎に帰り寒いから防寒服も着たま。足の防寒靴も脱がずにころげて寝てしま。その晩凄いい腹痛が起り玉のような汗が流れた。医師の注射も効無く朝六時、針を入れ、漸く止まった。

それから収養所長が、「君シユバ工場へ行け。」という、場内は暖かだ。出来あがったシユバを運搬する。十人一組で九人はロシアの婦人で親切に教えてくれた。この工場は、三交替で晩十時より、朝の五時までである。終ると次はロシア人ばかりです。汽車二十輛くらい。毛皮が満載です。皮に肉が、指ほども附着つしている。これをつめで起して、食べました。我々は夜中ですが、職場へ着けば、良いが着くまで五キロほど氷の上を歩かねば着かない。幾度かすべって頭を打つ。中には気を失い皆がかついで帰ったこともあった。それ

からバイカル湖附近の収容所に移った。何と言ってもM大佐の一行です。収容所に入っても丁寧に入れてくれます。車でレンガの運搬をし、「ノルマ取り」が点をつける。私は六〇点でした。働くことにより食事の量がきめられます。ここまで来ると同じ隊の戦友は、皆無くなり、青森県の伍長のY君でした。また長崎の戦友とかいろいろな集りです。だんだん仕事がなくレーニン、スターリンの革命の話ばかりです。しばらく滞在すれば、今度はウラジオ収容所。いよいよ帰れると思う。身体検査があり消毒や持物の点検をされる。時は昭和二十二年六月半ば、いよいよ船に乗る。船の中は米のかゆ。初めて米を口にした。舞鶴港に入港の時わが日本の景色をみて何と喜んだことか。

(大住在住)

戦時中の生活

戦争と現在の世の中を振り返り見て

吉岡昌子(五)

思い出すだけでも、二度と戦争にはあいたくない。私が、小学校四年生の頃でした。それは忘れもしません。警戒警報で家に帰る途中防空ずきんに、もんぺ姿、私家が一番遠いため、一人になったその時、空襲警報のサイレンがなると同時に、飛行機の爆音が聞こえてきたので、無我夢中で、走って帰る途中、急に飛行機が急降下して来たので、思わず、草むらに身をかくし、息をこらえてじっとしていると、「びゅーん」という音がして、近くの川に爆弾が水しぶきを上げ落ちた。飛行機が遠ざかったので、頭を上げ、一目散に、家に

帰りました。その時、私をねらって爆撃したのでしょいか、けんとうがはずれ、川に落ちたのが、不爆弾であったので、幸いに私は助かりました。その時の一瞬生きたこちは、しませんでした。家に帰えると皆が心配して、木かげから私を見守って、私の顔を見るなり、「ああよかった」その時は、私も声が出ませんでした。

昭和十九年から二十年にかけ、学校の勉強はおろか、開墾又開墾で、くわを持ったことのない私達小学生でしたが、それでも皆力を合わせ、平地ならともかく山を開墾して、さつまいもの苗木植えにお国のために、つくしました。それからというものは、毎日警戒警報、空襲警報の、くりかえしで、学校では、竹やりの訓練、開墾、家に帰えれば、夜は電気もつけられず、防空壕に入り、警戒警報解除になれば防空壕から出、毎日毎日がびくびくした生活でした。一番心配しましたのは、防空壕に入っている時、B29が飛んで来て入口の土が、バラバラと落ちる。そのたびに、生き埋めにならないかとはかり心配する。また夜になると大阪の空

を見上げると真赤になり、時には風の向きで灰が飛んで来たことがあり、夜もいつも防空壕に入られる用意をし、安心して睡眠をとることが出来ませんでした。

それから広島、長崎に原子爆弾が落ち、大勢の方達が犠牲になられ、親子「チリチリ、バラバラ」になり亡くなった人達も数知れないほどで、生き残った人達は、後遺症で苦しんでおられる。また一方では、結婚してまもなく戦争で夫をなくし、女手一つで子供を育て上げられた戦争末亡人の方達は、口に言い表わせないほど、ご苦労があったのだと思えば、胸があつくなります。

戦争が終わってから長い間、たべもの、着るものにも不自由をして来ましたが、今の世の中、特に若い人達は、戦争のつらさを知らないで、自由自在に暮らしていますが、いつまでこれが続くか、あまりにも人情性がないように思われる。「戦いはまず敵を知る」とよく言われる。太平洋戦争において、わが国が負けたのも米国の力をよく認識していなかった。しかし、敵

を知る前にそれはまず「己を知る」と言うことが大切だと思う。「己」をかえり見て、「己を知る」何事にせよ己を知る心がけを如何なる場合も、失いたくないものである。

「人生とは一日一日が、死への旅路であるとも言えよう。互いに「生」あるものは「死」にあたえられたこのきびしい宿命を直視し、これに対する道を厳粛に、しかも楽しみつつ考えたいものである。私の言いたいとすることは、すぎ去った日は、もう二度とかえって来ない、お互い自分達の力で明るいわが国、世界の平和と繁栄の道を今こそ真剣に考え、世の中をじっくりと味わい、毎日を感謝の気持ちで暮らして行きたいものです。もうあのような戦争は二度とないように、皆んなが力を合わせて、平和に幸せな暮らしを営むためには、国の政治（経済、文化、教育、福祉、自然保護）を正しく世界の繁栄と、平和と、幸福を共に築き上げて行きたいものである。

（松井在住）

沖繩の空に

古川 章（五）

△なつかしさに天を仰いで呼びたく、さびしさに地に伏して泣きたい▽と亡父への思慕をこのように表現した作家があった。これはまたほくにも言えることである。

「なつかしき」あるいは「さびしき」は、ぼくが「父」ということばを口にするとき、ほのかに淡く感じるだけにすぎず、それは現実の想い出をもたないものなのだ。それはあこがれ、またセンチメンタルなイメージにつながる。

この「父」へのなつかしきとさびしきは、昭和二十

年六月に父が沖繩で戦死したことにはじまる。

当時、国民学校の二年生だったぼくにとって、はつきりした父との記憶をもたない。一つの対話さえも無いのだ。ただ多くの兵士たちの乗っている駅頭の列車に向かって目の丸の小旗をふっていたぼくと、父であろうと思う人の長身の軍服姿がまぼろしとなっている別れのシーンしかもない。そのまぼろしはいつも美しい。年を経ることに美化され、一幅の絵を見るようなイメージとなってぼくの内深く棲んでいるのだ。

昭和二十五年四月、中学三年になったぼくは父の死をたしかめるべく、沖繩護国寺の住職、名幸芳章氏に手紙を書いた。それは「戦死した父恋う少年の手紙」として琉球新報に報じられた。

それからしばらくして川崎信志という方から手紙をもらった。それはぼくの手紙を読んだ沖繩の住民の中に父を知っている人がいるという知らせだった。ぼくはその日の驚きを忘れることはできない。手紙はつぎのように書いてあった。長いが引用することとする。

父の遺品

「あなたが名幸師に送られた、切々胸をつく父を思うお手紙拝見しました。私も名幸師と共に沖繩戦線に散華された日本軍将兵のご遺骨の収集に協力しております一人です。あなたのお手紙を拝見してすぐ当時の新聞社にそのことを出してもらいました。早速詳しい父上のご様子がわかりましたので、名幸師にかわりお知らせいたします。

お父上の部隊は那覇市の北方に陳地をもつ一部隊でした。お父上の部下の一人で生存者であり、お父上の英霊及び遺品を最後まで持っていた「長嶺栄吉」さんから聞きした話です。

お父上の部隊は、お父上を隊長として七百八十三名（その内生存者三名）であつたとの事。長嶺さんが隊長の命を受けて後方に弾薬を取りに行つて、わずか二キロぐらいの所ですが、猛砲撃の中を七、八時間もかかつて部隊に帰りついて見ると全員戦死しておられたのです。古川隊長も重傷を（右胸部）のために倒れて

それだけ書かれてから、ご自分の髪と爪を切つてくれといわれたので涙を吞んで髪と爪を切り終わると、長嶺さん他二名の兵に早く後方へさがれと手を振られていたが、長嶺さんが再び抱き起こす時に、がつくりと前にのめられて帰らない英霊となられたのです。長嶺さんはその遺髪、爪、遺言書、日本刀を持って戦火に追われて島尻へ南へ南へとさがって行かれたのですが、その間約一カ月も持っていたのですが、最後にはどうしても持つていくことが出来ず、喜屋武部落の片ほとりに埋めて、六月二十三、四日頃、米軍の捕虜となつてハワイまでつれて行かれて二年目に沖繩へ帰還されました。現在の長嶺さんは元気で大工さんをやっておられるのですが、この話をしながら「古川隊長は本当にいい人でした。部下思いでした」と幾度も幾度も言われていました。

その遺品を埋めたところもほぼわかつてるので、近日、長嶺さんに案内してもらつて私達は発掘に行こうと思っています。

おられたので、長嶺さんが抱き起こして、「隊長殿、しっかりして下さい。長嶺であります」というと苦しい息の下から「東へ向けてくれ」といわれたのです。しかしこれはことばが出ず、ただ手を振り動作だけでしたが、長嶺さんの懸命な気持と古川隊長の気持とが以心伝心というのでしょうか、長嶺さんにはそうとわかつたので、身体を東へお向けすると静かに敬礼をされてから「紙はないか」これも作動のみ。「なにもありません」と答えると、ご自分のポケットの裏の布が白いの、その白布を取られて、かたわらのすすきの茎を取られ、口で細かくさいて筆のようにされ、胸から吹き出る血潮をそのすすきの茎につけて、遺言をかかれました。それも手がきかず、口にくわえて書かれたのです。その書かれた文字を今でもはつきりおぼえています。

「お父さんはこの沖繩で死ぬ。この日本刀はお父さんのかたみと思つてくれ」これはきつと章君にあてたものでしょう。

「おそらく七年間も土の中にあるのですから、残つていくかどうか心配ですが、せめて日本刀でも発見したら、すぐ送りいたしましょう」との長嶺さんのお話から察して、戦死されたのは、那覇市北方の松川の缶詰工場附近で、一九四五年五月二十一、二日頃と存じます。何と偶然か、この手紙を書いている月日と七年間の違いはありますが同じではありませんか。長嶺さんはいもつと早く発掘して御送りしたいと言われていたが、ご遺族のおところがわからず、今日まで出来なかつたのです。

章君

お父上は部下にしたわれた、最も日本軍人として、めずらしい人間味のあふれた方であつたとのこと、そのお父上の地上に残された唯一のものは章君でありましょう。

君の胸中を推察する時、私達は何も申し上げる言葉もありません。が、次代の日本を形造る君達若人は、戦争の悲劇を身をもって体験された貴い人間として、

将来は世界平和のために、そして南海の果てに散華されたお父上の霊をお慰め出来得る世界人となれんことを祈りつつ、お知らせのペンを置きます。」

行きて浄めむ

こうしてつかみ得た父の死の最後に、ほくたち家族は新たな哀しみをもった。このことは、「公報という一片の紙片が果たして真実であるか、たしかめるために」。沖縄の遺骨の上に咲いた野菊にも似て、可れんな一つのエピソードである」と当時、新聞が書いてくれた。

中学から高校を終えたぼくは、立命館大学の日本文学科に入った。昭和三十二年であった。そしてぼくは、学園の先輩、平見昌巳という人が、沖縄郵便友の会の招きで渡島することを知った。いつかぼくにも沖縄へ渡る機会があらう。その日、父のまほろしを思いうかべ沖縄の野をさまよう自分の姿を想像した。

ぼくは自分のその気持を平見君に托した。それは、自分のつたない歌「みんなみの沖縄島にいつかわれ行

きて浄めむ父のおくつき」と、父にとってなつかしい郷土の石であった。平見君はこころよく引き受けてくれた。

沖縄についた平見君は、多忙な用務をさいて名幸住職や父の最後を知っていた長嶺氏に会い、話をきいてくれた。父の戦死した日は六月二十四日よりもう少し早く、また父は「石嶺」という激戦地で死んだという。そのことは大阪出身の小川という方も父の最後を知っておられたことであつた。

そして平見君は郵便友の会、沖縄教職員会の人たちの案内で、それらの地を歩き、具志頭村の大屯という小丘に六尺近い墓標を建ててくれた。おもては、故陸軍少佐古川長彦戦死の地、裏側には、建立願主遺児古川章、施主平見昌巳、沖縄教職員会と書かれている。

その墓標の下に、ぼくの歌とふるさとの小石を埋めていただいたのである。

沖縄にはいまもお、身元もわからぬ多くの戦士たちがあるときく。父は幸せなほうである。これも平見

君の友情と、多くの沖縄の人たちのあたたかい思いやりをいただいたためである。

父をしのぶとき、これらの人たちがなつかしく思い出される。みなさん、本当にありがとう。(二十六歳当時の手記「いしずえ」日本遺族会編刊行より)

(草内在住)



激戦地であつた沖縄。ここで多数の人が犠牲となつた。

一戦争未亡人の記

辻 尾 逸 子 (七九)

田辺町では平和展が催され、街には物資があふれ豊かな生活が出来る今日、五十余年前の戦争で明けくたえした過去を振り返り今更悲しかった日々が思い出されます。終戦から四十六年経った今も戦死の主人が何処かに生きていられるのではないかと思う日もあります。穴という穴は火炎放射機で焼かれ生きている人はないと病院船で帰った人から聞きました。間もなく五十四回忌がまいります。子供達と共に無事お勤めをしたいと思う昨今です。戦争の体験者として戦時中の苦しさを知って頂きたいと思い書きました。

で、畑でさつま芋、麦といろいろ作りました。配給品は麓の米屋さんまでぬかの入った土色のうどんなのこまぎれや大豆の油の絞りかすを貰いにリヤカーを引張って行きました。ごはんにまぜて炊くのです。一枚の布も「衣料切符」で買い、何もかも自給自足で作らねばならなくなりました。醤油造りも教えて貰い炭焼もしました。炭焼は火の加減を見に夜中に出かけねばならず、冬はとてもつらい仕事でした。

敵のB29艦載機等、度たび上空を飛来しました。はげしくなるにつれ、田んぼも作ることにきめ小作から少しづつ返して貰い、近所のおじさんに、水田のすきかけをたのみ作りました。粃を干す庭がないので、座敷を使い、廊下には藁をならべ粃を干しました。またさつま芋の苗床を作るために近所から牛糞を貰い青草とまぜ、いきりを出すことも教わりました。町の命令で御先祖様が大切にしていた牡丹園の数千本の木すべて引抜き野菜畑に変えました。小さい子供まで、畑仕事を手伝せ生活してまいりました。田舎だから何か食

思いかえせば昭和十五年私二十八歳の五月主人は応召で出征、中支にまいりました。老父母と三人の子供お腹に一人と私の七人の家族を残しての出陣でした。赤紙一枚でさぞ出にくかったつらかったであろう、心の内がしのばれます。

千人針作り、出征兵士の見送り、慰問袋作りといういろいろのことがあり、やっと終戦を迎え、うれしやと思つたのもつかの間、戦死の公報、中支に三年転戦やつと帰還が叶い帰途についた船をインド・ビルマ国境の敗戦に勝利の部隊としてまわされ、世にいうインパール作戦に参加、一年余も前に彼の地の露と化していられたとは。

印度国アッサム州カングラトングイ東方四軒エクバンが公報の戦死場所でした。二十九歳で出征、昭和十九年五月十八日死亡、三十三歳の若さでした。遺児である息子は父親の年令をはるかに越し、役所に勤務定年を迎えるまでになりました。食糧の不足は田舎も百姓をしてなかつたため、毎日の食糧事情はひどいもの

べる物があるからよいものの街では食堂の前に行列、それも水が多く箸の立たない雑炊が売られ、それも全部に行き渡らず、あぶれる人も沢山とか、餓死する人もあったと聞きました。今から思えばうそのようです。戦争中白無垢姿で、戦死の主人の後を追って自刃する妻の記事が報道されていました。私には四人の子供がいる。この子等を残して死ぬことは出来ぬと心に強く言い聞かせて生きてまいりました。生きる欲びこんなよい時代が来ようとは、国のために死んで行かれた沢山の人々が哀れです。この頃のように捨てることが当たり前なことには耐えられません。ちょうどこれをしたためている時、ラジオのリクエスト曲、ガード下の靴磨きの歌が流れて来ました。昭和三十年代になって末だ戦災孤児がお金をかせぐ時代であったのかと万感胸にせまりました。戦死地を一度はたずねたいと思つた日もありましたが、娘婿がエクバンをたずね幾枚かの写真と石を持帰ってくれました。仏壇にまつり、毎日お参りすることに老いの身を安んじております。

最後に亡き主人に十一人の孫の顔を見せたかったと思います。

追伸

一家で食べるために作ったさつま芋まで供出させられたこと

金物は火鉢から仏壇の花筒まで

雨樋は全部竹に変えさせられたことも書きたかった

(天王在住)

戦時下の生活

木元アイ(六九)

四十数年の平和にとっぷりつかって戦争のあの頃を忘れがちになっていた私達、今一度追憶の糸をたぐって見たいと思います。昭和十二年に小学校を卒業した年に、支那事変が勃発しました。新聞紙上では連戦、連勝、我が軍は天をつく勢いで報道されましたが、我方の損害は伝えられなかった。戦線は中国全域に広がりが村中の働き盛りの男の方達は赤紙一片の召集令状で、老父母を残し最愛の妻子に万感の想いを振り切つて勇躍戦地に赴かれた。

昭和十六年には大東亜戦争の火蓋は切られ、米英の

ちにはソ連等大国を相手に戦うことになりました。当時軍部の圧力は大了なもので、言論の自由は封鎖され(特高警察)世界の動向に通じておられる愛国の士は次々と投獄されました。刻々と戦況は悪化の一途を辿り、末端の農家でも手作業ばかりで作った米は厳しい割当てのもとに供出したものでした。戦争に勝つためにはどんな辛棒もせねばなりませんでした。半麦ご飯、お粥おじや団子等随分貧しい食生活でした。食糧不足は深刻で都会では、主食に大豆や甘藷が配給されたと聞きます。田舎に親戚のある方々は大きなリュックを背負って食糧の調達に帰ってこられた。乏しきをつかち合つての苦しい生活、それに空襲に備えて都市よりの疎開者を受け入れて、家も納屋も俄か作りの炊事場をこしらえ、雨露を凌ぐだけの貧しいどん底生活をされました。都市の学童も親の許を離れての集団疎開が、方々で行われた。我が家でも都会に住む親類の子供を父の戦死と共に引き取り、姉弟のように長いこと暮しました。私達女子青年団員は、毎月公民館に集り村出

身の兵隊さん方に慰問の手紙を書いたり留守宅の老両親や幼な児を抱えられた若い奥さん方を助けて田の草取り等、炎天下十数人の団員は力を合せてお手助け勤労奉仕をしました。また縫物奉仕や甘藷畑の共同栽培などいろいろやりました。「ほしがりません勝つまでは」の標語は至る所に貼られ、若い女性憧れの着物も長い袂をぶつ切り切って元禄袖にし、母の着物でモンペや上衣を作り、外出着にし白い綿布を染めて足袋を作り、皆不平も不満も言わず、勝つまではの辛棒と純情な大和撫子でした。金具類も軍需用に回収され、床の置物、佛具、鉄徳の火鉢等大切な家宝の品々も国の為に出さねばなりません。国の政策に縛られた生活に耐えて行かねばなりませんでした。戦局は我に利なしの一端を辿り、我が村にも続々と戦死者の公報は入り、我が子、我が父、我が夫をそして婚約者も帰らぬ人となり、心のそして生活の支えを失って悲嘆のどん底に陥ちいた方々、どんなに大勢おられることか。

昭和十九年には本土空襲も熾烈になり、大都市や軍

事施設は次々と爆破して行きました。大阪空襲の夜など、西の空は真赤になり、真黒な灰はここ田辺の方にもにも飛んできました。家を焼かれ、親子夫婦ばらばらになり、戦災孤児や浮浪者は巷に溢れ、悲惨なこの世の地獄絵は至る所で展開致しました。田舎でも「燈火管制」は厳しく防空頭巾を枕許にモンペをはいて寝たものです。家に一つか二つしかない電燈に覆いをかけて暗くし家族皆寄り集まり子供は勉強を女は縫い物やわら仕事など夜なべに精を出し、今思うと温かい家族のぬくもりがしみじみ懐かしく思います。

昭和二十年八月十五日正午、天皇陛下のポツダム宣言受諾の玉音放送を涙と共に聞いた。その日以来怪鳥のようなB29の来襲は無く夜も明るい電燈はともり、「ああこれから敗戦の憂き目にいろいろ会はねばならないだろうけど戦中のことを思えばどんなことにも耐えて行けるわ」と思ったものでした。その昔、日露戦争の折に「子等は皆戦の庭に出て果て、翁や一人山田守るらん」と明治天皇は詠まれました。もう二度とあ

んな戦争多くの人の幸せを一ぺんに潰してしまう戦争はこないよう痛切に思います。「国破れて山河あり」とか土に生きる者の強さ、幸い栄養失調にもならず、私達夫婦は健康な平和な老境を心豊かに感謝の日々を送らせて貰っております。

(宮津在住)



戦争中、男性不足から、女性は国防婦人会などを組織し統後を守った。

赤いはな緒のわらぞうり

岸田 映子(五)

今から四十余年前、私がまだ十歳に満たない少女の頃である。

京都市に住んでいた私は太秦国民学校の生徒であった。若い男教師は戦争にかり出され一クラス百名のマンモス学級となり、年離れた女教師が多かった。その頃の服装は、防空ずきんをかぶり「わらぞうり」を穿いていた。

決戦服にモンペを着用し、運動靴はクラスに八名ずつ配給制で渡され、その順番がまわって来るのが待ち遠しかった。つぎはぎだらけのモンペは常に洗濯し何

処で倒れても分かるように名札を縫いつけてあった。

「わらぞうり」は農家へ友達と買いに行くのである。お年寄りが、わらくずだらけの中でコンコン木槌でわらを打ち、またたく間にぞうりを編んで行く。その手先きを魔法使いのようだと私は思った。

「はな緒のところへ赤い布をいれてほしい。」「わたしも」「わたしも」と口ぐちに注文する。「赤と白を入れて可愛くしておくよ」おばさんは、ほんの少しの布を細く切りさいて、わらに混ぜて編んでくれた。わらくずを燃やし炎でまわりをサツと焼く。わらの匂いが鼻に沁む。そのぞうりをしっかりと抱いて夕焼けの道を走って帰ったものである。

家に帰ると夕飯が待っている。お米など殆んど入っていない「増量ぞうすい」。大根葉が入っていたり、カボチャ、サツマイモ、とにかく手に入った野菜や野草を放り込み、人間の食事とは思えない物を、松葉の枯葉を集めて炊き上げるのである。土間には「すす」が舞う。

電球に黒い布を被い、薄暗い食卓で湯気に包まれて家族全員「ぞうすい」をすするのである。

夕飯が済むと勉強にとりかかる。ザラ紙の教科書を読むのである。小さな字を薄暗い電燈の下で読むのは、つらいことであった。

「目を悪くするから、早く寝なさい」。勉強のこともよりも身体を気づかってくれる母の声にしぶしぶ床に入ったものである。今読んだばかりの本を暗誦しながら眠るのである。

ラジオを聴くこと、本を読むことさえ停電、空襲警報で中断され唯一の楽しみを奪って行く。

栄養失調で死んで行った人もある。「食べる本能」を満たされないあの頃――野に咲く花を食べ、草苗の豆を「おやつ」にしたっけ。

広島や長崎で原爆にあい一瞬にして灰と化した私達同世代の人たちもいる。今思うと、そんな中で「よくぞ生きてこれたものだ」と背すじが、ひやりとする。「京都に住んでいたからこそ助かったんだ」そんな思

いが心を横切る。

終戦の年、米軍飛行機からチューインガムやチョコレート撒かれ、それが落下するのを追いかけた男の子たち。「毒が入っているよ」と注意され横目で睨んで生つばを飲み込んだあの頃 チューインガムやチョコレートなるものを知った。

四十余年経った今、世には商品が溢れ、物の大切さを知らぬ人々が往来する。「飽食時代」「使い捨て時代」とまで云われている今日、数十万円もするオートバイにスリルを求める未成年者が続出している。その親たちも戦争の悲惨さを知らない世代になっている。物を買ひ与えることで子供のご機嫌をとる母親教育が益々子供を歪んだ方向へ走らせるのでは？

戦争は二度と起してはならない。今、生きている人たちが戦争について語り正しい判断と行動をしていかなければ日本は平和だと言いながら滅びて行くような気がしてならない。

街を歩いてふと店先きで「わらぞうり」がぶらさが

っているのを見かけた。「民芸画」と書かれたコーナーには美しい布を入れて編まれている。手に触れて私は過ぎし日を思い、心の芯がチクリと痛んだ。

(田辺在住)

戦争中の思い出

西川 博子(五七)

私が終戦を迎えたのは、国民学校五年生の十歳の時でした。それまでの間にいろいろなことがありました。

ある日先生は、「鍋墨のある人は学校へ持って来て下さい。」と言われ何に使われるのかなあとと思うと、先生はそれを水でこねて校舎の白壁を黒く塗りつぶされるのでした。また、私達の着ている白い服は、家で黄土色に染めて着るようにと言われました。建物も人間も、敵機にねらわれないようにするためだったのです。

勉強はと言えば、避難訓練ばかりでまともに出来ず、防空頭巾と非常カバンは、いつも放すことなく登校し

ました。学校の校庭には、練習機が疎開でいっぱいになり、運動することさえ出来ませんでした。その上食糧不足で、上級生は山を開墾して大豆をまいたり、サツマイモを植えたりしていました。私達は、農繁期になると五、六人に分かれて、兵隊に行かれて、人手のないお家へ、勤労奉仕に行ったりもしました。

食糧品、その他どんな物でも配給制度で、チケットがなければなかなか手に入りませんでした。ご飯は勿論、麦や大根等を混ぜて炊いたものばかり食べていました。

お国のためにと、金属製の物は皆供出させられました。また市内の方は空襲が激しく、親戚の家財道具を疎開で預ったこともあります。兵隊さんが入隊される時など、日の丸の旗を持って見送りに行くのです。我が家でも、兄は伏見の三・八へ入隊し、父は竹槍を持って田辺小学校へ練習に行きました。家に残されたのは年寄りと女子供だけで、とても心細かったのを覚えています。

各自の家には、防空壕が掘ってありました。昼夜を問わず、空襲警報が発令されたと思ったら、敵の飛行機B29が編隊となって頭の上を飛んでいました。また、艦載機と呼ばれるものは、人を見つけると急降下して来て射撃するのです。急いで防空壕に避難すると、中は電気はなく、「トウシミ（お皿に食用油を入れて、細い芯の様なものに火をつけたもの）」をつけて、灯りがもれないようにして、毎晩その中で寝るのです。あの怖かったことは忘れることが出来ません。祖父などは「同じ死ぬなら畳の上で死ぬ。」と言って、防空壕へ入ろうとしました。

終戦直前には、学校へ行くことも出来ず、各部落の公民館で勉強しなくてはならなくなりました。本を読むか、漢字の練習をするのがやっとでした。

大阪の爆撃には、見る見るうちに西の空は真っ赤になり、燃やされた襖が灰になって、そのままの形で飛んで来たのと、はつきりと覚えています。その後の二・三日は何もかも灰で真っ黒でした。

最後には、木津川へB29が火を吹いて落ちて行きました。

幼な心の思い出ではありますが、頭に浮かんだいろいろなことを書かしていただきました。このような体験は、私達だけで充分です。子供や孫には二度と会わせたくありません。今世界のあちこちで起こっている戦争が、一刻も早く終わることを願ってやみません。

（田辺在住）

戦時中の思い出

井上 ミツエ（八三）

昭和十二年（一九三七）七月七日、蘆溝橋事件で日中戦争が始って以来、米が配給制になり、つづいて衣料品も切符制で自由に求められなくなった。食肉・酒・酢・醤油・塩・牛乳・油・砂糖等の日常食料品・石鹼・マッチ・ローソクなど日用品も統制下で、長い行列をせねば購入出来ないものであった。当時私は女学校教員で、しかも幼児の養育中であり、食糧不足のため、栄養失調になってはと官舎の周辺で小麦・大豆・馬鈴薯・南瓜等を作り、小麦粉麵米犬・高野豆腐等に加工して貰い、空腹を満たしていた。

十五年（一九四〇）の前年には八紘一宇の精神で檀原グラウンドの奉仕作業に宿泊して生徒と共に出かけた。十六年（一九四一）十二月八日早朝、ラジオ放送で真珠湾攻撃を聴き興奮した。これから先、どんなになるのかと不安でたまらなかった。我が国は神風が吹けば敗けることは絶対にない。日清・日露の戦争のように必ず勝つと歴史で教っていたので、身を捧げて働くことは当然であると思えた。今まで以上に努力を重ね、早朝より学校へ行くまでと夜の手仕事に専念した。出征兵士の見送り、国防婦人会への協力はいふ迄もなく、教室では慰問袋作り、千人針も刺した。

学校の広い運動場を全職員で開墾し、分担して甘藷を作り帰学の折に持帰り主食の補いにした。英語の授業は敵国語ということで禁止になり、国語や園芸に変更。農園で田植の実習もした。農繁期に一・二・三年生は奉仕で麦刈・馬鈴薯堀、玉葱束ねなどをした。四年生は姫路衣料廠の軍服裁縫で教室は工場に変わり、各家庭にミシンの供出を命じ、軍よりの係員はきびしく、

裁断の仕方、部分縫・縫製・仕上げの仕方などの指示。家庭科教員は助手として実習した。五年生は学徒動員で遠くの軍需工場へ出発し、厳しい指導の許に従事した。卒業式も工場で簡単にすまされたことなど、先日あった女学校時代教え子のクラス会に招かれた折にも、当時の暗黒時代の思い出を語り合っていた。

また被服教材用の糸・針等の配給を奈良まで受けに行く途中、橿原でB29に怯え森の溝の中へ姿を隠したことや、奈良の学生寮に居る娘に南瓜で作ったパンを持って面会に寄った時娘達は勤労地より荷車を引いて帰り、朝は炊豆一握りを味噌汁に入れるだけの食事だったので、パンを喜んで守衛さんも共に喜ばれた。家の防空壕には手伝人に警報が出れば子供をすぐ入れて貰うように頼み、私は夜、防空頭巾を冠り、奉安殿まで走り守衛した。戦争は厳しく沖繩は常な事件で多数の犠牲者が出たこと。B29の編隊によって東京・大阪・日本中諸都市が焼夷弾で焼かれた事（京都・奈良は特に守られていたようであった）どんなになるのかと

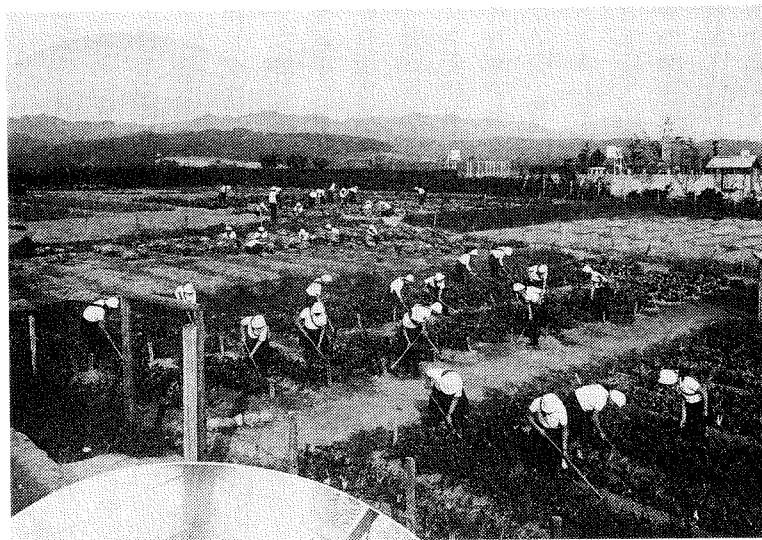
心配であった。八月六日広島に、続いて九日長崎の原爆投下で不安で堪らなかった。八月十五日正午、玉音放送で終戦を耳にし涙がこぼれて何とも言えず茫然とした。南方で妹婿、従姉の長男の戦死、姉の一人息子、従兄弟と身近かな人達の戦死を知り、国のためとは思っても遺族のことを考えると、悲しくて慰めようが無かった。

終戦後も物質不足で食品を闇市で求めたり、物々交換で大切な所持品と替えたりした。その後学制改革も行われ、世の中が大きく変化したので少しは落着き、生活もやや安定するようになった。それから七年経った昭和三十年に、京都の和裁専門学校に転勤し、二十九年間学生指導に専念した。壮年期の種々の体験を終えて、八十三歳の高齢者となった現在、朝日新聞連載中の女の太平洋戦争記事を読み、当時の悲惨な実態を種々回顧し思い出を新たにしている。また、湾岸戦争があつたりして思い出すが、どんなことがあつてもあのような過ちは繰り返してはならない。いつまでも平

和であつて欲しいと念願している。

私は微力ではあるが、和裁の技術を生かし婦人部文化活動を通じて、知り合った若い人達に日本伝統の和裁技術を伝授し、後世に伝え度い気持ちで、楽しく明るい余生を送りたいと思っている。

（草内在住）



女学校の園芸の時間。当時、慢性の食糧不足から、学校の運動場等も畑にした。

京都に住んでいてよかった

西岡 春二郎 (七五)

私事になり申訳ありません。実家には、昭和九年頃、父母兄と私の四人暮らし。私の戦争始まりは、兄現役二十歳で昭和九年十一月まで満洲従軍。続いて昭和十二年十一月まで支那事変。その間に母五十二歳昭和十二年末死亡。同十六年父六十二歳死亡。あとは兄と二人暮らし。私は昭和十七年四月二十六日応召、鯖江で教育を受け、加古川市、香川県と転々し衣食住になんの心配なく一生懸命ひたすらお国のために尽くすだけでした。ところが兄は昭和十八年に嫁をもらってしばらくして昭和十九年三十才七月に第二次世界大戦に応

召された。私は昭和十八年頃から時々外泊を許され、そんな日々を三年四か月勤務し、私は親も亡く独身者であるので世帯もちの戦友より至極のんきにめぐまれた内地での戦線に参加したのでありましたが、昭和十九年頃から急に空襲が激しくなり外泊帰隊途中東和歌山市駅附近は被災地となっていた。次の外泊には大阪市内空襲のため交通が止りトラックで本部である大阪城へ寄りますと、一部がまだ燃えていた。やがて紀勢線も運転することになって汐岬によく帰隊することができた。それから終戦前のこと岬のはるか沖の方面に航空母艦できていたのか艦載機が私共の兵舎を攻撃され、また艦砲射撃に打ち込まれたが全員無事だった。夜は焼夷弾が雨のように降ってきた。終戦がもう少し延びたら上陸されていたのではないかと思う。まもなく八月十五日終戦となり、九月九日まで鉄道輸送の関係か二十五日間遅れて京都市上京区の我が家に復員することができた。兄はすでにビルマに従軍中であつた。私は少しの米と身の廻り品を持ち帰ったので

一時凌ぎはできました。その数日後近所の銭湯に行き、軍隊より払下げの作業ズボンを着用して盗すまれました。いかに綿製品に困っているかと、びっくりした。また元の就職先は平和産業で企業整備とかで軍需産業に変っていた。そのため無職が何日か続いた。その間でも戦友の先輩より空襲にやられ私の家にとめてくれんかとか、また私の衣料品はすでに食糧品に換えられていた。だが私は何といてもこの京都が空襲からまぬがれ無事我が家があるままあったことしみじみ有難いと思った。その後田辺町の知人から呼び声があつたのと食糧不足と兄の消息が全くつかめないで思い切つて昭和二十一年二月より田辺町の人となった。これでもようやく落着きをとり戻し元の汐岬当時を思い越し別れる前日に世帯もち六人はすぐに復員し、残り独身者十六人のよせ書きを依頼した名簿を作りそれにより先づ最初にK君在住の明石市を訪問する。その住所には家は無く災害地であつた人にききながらようやく着いたところがトタン張り堀建小屋内の生活だった。そ

の後K君からの便りの抜すい「汐岬時代を思い出しますと昭和二十年七月二十七日を覚えていらつしやいますか敵の艦砲射撃のあつた日です一生忘れられない日だ」T君より昭和二十二年九月五日文中抜すい「秋らしくなつて参りました夕暮迫る頃ともなれば焼跡の草むらからすきとおるような哀調を帯びた虫の声も聴かれます」……「毎日衣食住のないづくし物の高い話で人情も道徳もない世相荒れに荒れた人間共の世界……現在の東京の若い女の人を見ていると皆パンパンガールに見えて幻滅な悲哀を感じない訳には行かないこれもチヨンガールの敗惜しみか」昭和二十一年五月N君(和歌山県)「帰御後は全焼の厄い会いました田舎に引越した現在は食うか食われるかと唯食のことにみに人間は動いているようなのですからね。食う事が出来れば一人前以上とでも申しませうか」十六名の寄せ書中I君「世の中は四尺五寸になりけり五尺のからだ置きどころなし」「T君忍び難い時に想ひ出してくれ朗らかな助平〇〇兵」以上、その後兄

は昭和十九年十月二十六日ビルマにおいて戦死。この公報同二十二年十月とどく。義姉は親元に帰り実家は絶えた。両親の死亡も早めたように思う。平和とは何んだらうか。一人一人の心の向きにより平和があるのではないだらうか。

(興戸在住)

青春のひとこま

西村 俊一 (六六)

冷雨が南天の葉をたたいている日暮の一時、窓際に立ってぼんやりと雨音を聞いていると今日までに出会い、そして別れた人達との様々な想出が走馬灯のように次から次と消えては浮び、浮んでは消えてゆく。喜びや悲しみを入れまじえて、関釜連絡船興安丸デッキに私が立っていたのは、昭和十七年も十余日たらずで終わろうとしている時であった。ドラのにぶいというか、物寂しい音にうながされて巨体が岸壁をゆっくり、ゆっくりと離れてゆく。蛍の光、見送る人、見送られる人の顔々、夫婦か兄妹かそれとも親と子か、それぞれ

れが、それぞれの思いで別れを惜み、惜まれていつまでも互に手を振り交している姿・別れとはこんなものかと今になって知る思いである。刻々と薄れゆく山脈波間に浮ぶ人の顔、父の顔、母の顔、その時ふと再度この港に帰る目があるのだらうか、そんな予感が心の隅を通りぬけてゆく。

船が外海に出るときすがに波は荒い。ピッチング・ローリングまたピッチングそのたびに私の身体は右に左にと往ったり来たりそんな時、船内放送が繰り返される。よく聞くと我々青年は非常の場合でも救命ボートの利用は出来ないのも一秒でも早くブイを身に付けて海に飛び込み船体から少しでも遠くに離れるようにせよとの指示で、それが終ると今度は乗船者全員にブイの付け方を繰返し放送している。私はこの船が無事に釜山港に入港することを祈るばかり、下関を出航して何時間くらい経過しただらうか、うつらうつらしているとボーボーと二度興安丸が汽笛を鳴らす。どうやら釜山の港に入港したようである。乗客が荷物をまとめ

て出口の方へ移動してゆく。子供の泣声、互い呼び交す声、無事に入港したので急に騒がしくなった。

そんな集団の中に私も巻き込まれ、気が付くと釜山駅のホームに立っていた。ホームには二本の国際列車が待っている。新京行と北京行で一日四列車、愛称は大陸・興亜・光・のぞみ・と覚えているが私の乗った列車の愛称名は忘れてしまっただけだ。大邱・竜山・京城・平城・安東・を通過して列車は奉天駅のホームに停る。この駅から大連・旅順方面新京牡丹江・満州里方面そして今通過して来た京城・釜山方面と私の目的地北京・山海関方面へと分岐する交通の重大要所である。その奉天駅を発車した列車は鉄路を北京へ北京へと急ぐ。錦県近くまで来ると、車窓の遙か彼方地平の果に没しようとする真赤な太陽、一度これが見たかった私。車窓からじっと見つめる大きな夕日。私の前の席にいる満鉄の社員がもうすぐ山海関に着くよ、着くと同時に税関員の車内や荷物の検査が始まる検査が終わると、その次はホームに降りて紙幣の交換もしな

ければならないが君は華北交通の社員になるのだから交換する必要はない。日本の紙幣が充分通用するし中国人から物を買う場合でも都合がよいと思うと、細かく教えてくれる。

私の勤務箇所は天津鉄路局。住所は天津特別市十三号路六経路でイタリヤ街の端にあり、万国橋も程近い阿蘇寮である。寮生は私を入れて二十一名。他に三浦寮母さんとその子供二人、雑務娘二人、軍身赴任者の寮で食堂もない。食事は天津東站前の富士寮まで出向かなければならない、まことに不便な寮である。この天津で一人だけ気楽に話し合える人がいた。その人の名は小林さん。京都市内出身で天津水路警務段に勤務していた。彼との話しはほとんど京都のことばかり。その彼とも僅か六か月で永遠の別れとなってしまった。昭和十八年の初夏、彼の勤務は天津から保定に至る白河を運行する舟団の警備で任務遂行中敵襲を受け、大陸の荒野に三十八歳で生命の灯を消されてしまったのである。京都に妻子を残したまま、その通夜も私一人、

永い一夜であった私の人生で最も永い一夜であったと思う。その時私は十八歳。

(河原在住)

「戦争に行つて死ぬのはあたりまえ」の精神はこうして培われた

林 憲 二(七〇)

小学校に行く前から口にする歌は、僕は軍人大好きよ。今に大きくなったなら、勲章つけて剣さげて、お馬に乗ってハイドウドウ」親から教えられ、あどけない子どもがみんな歌った。

子どもの頃の遊びは兵隊ごっこ、竹で鉄砲や剣をみんなで作り、木津川の川原へ行つて溝を掘ったり、木々を集めて橋をかけた。家庭での教育は、「早めし、早くそ、早風呂」で、ぐずぐずしていると兵隊に行つたから困るとたたきこまれた。

四月になつて小学校へ入学すると、桜の花の美しさ

水師營の会見は教科書のみならず、唱歌としても教えられ、旅順開城約なりて……乃木大将と会見の、所は必ず「水師營」と大声で歌う。東郷元師も何回も習い、広瀬中佐も教材にあつた。教育勅語は暗誦し、自習時間にはこれを書いて提出したものだ。

二宮金次郎は年中教材になり、貧しい暮しに耐えて、親孝行をし、世の人々のために尽し、よく学んだ最高の手本とされた。ひたすら勤儉と忠孝を教えられ、人々は朝星夜星をいただいて働き通し、昼は梅干入りの弁当を「日の丸弁当」「国旗弁当」ともいい、これも陛下のお蔭でいただけると教えられた。生活の貧しさに対するなげきは、鍛練主義に、忠義と義理と人情、武士道の鼓吹・忠義は軍事をもつて表現、国家観念を軍国主義化する。

「村のかじや」を習つては仕事に励め、「かえるとくも」では「しだれやなぎにとびつくかえる、とんではおち、おちてはとび……とうやなぎにとびついた」と精神一到何事不成を教えられる。

と、桜花はバット咲いて、バット散る、これは日本人の心を現し、戦争に行つたらお国のため、天皇陛下のためにバット散ることが大和魂と教え込まれた。

天皇陛下や皇后陛下の話を聞く時は、背筋を伸ばし、膝に両手を揃え、姿勢を正して聞き、国の父さんお母さんであり、神様のような方で直接見ると目がつぶれるほど偉い人であり、国民はすべて忠義を尽さねばならないと常に話されてきた。

小一の修身教科書には「チュウギ」の題でキグチコヘイハ、ラッパクチニアテタママシニマシタ。と壮烈な戦死を讃え、忠君愛国を教えられた。「一太郎ヤイ」の教材では、遠い山道を夜道し歩いて息子の出征を見送りに来たが、直接逢えず軍用船は出港、母は大声で「天子様のために尽せよ！」と叫ぶ声に甲板の上で鉄砲を挙げて応える姿を絵図入りで教えられた。「水兵の母」も教科書で習い、毎年の学芸会では「一太郎ヤイ」と共に行われ、見に来た父母からは大きな拍手が起つた。

旧制中学以上の学校では、軍事教練を課せられ、現役の将校が配属された。朝礼では宮城遙拝、皇太神宮遙拝を行い、校庭に天皇、皇后の写真を納めるための御真影奉安殿というお宮さんのような立派な社を建て、毎日の登下校の際には最敬礼をして拝んだ。総ての情報は検閲され、大本營の発表のみが報道された。

天皇の存在する日本は世界一良い国、強い国と教えられ、日本は戦争をすすめることによって、世界をよくし、世界の人々のために尽すのだと教え込まれた。治安警察法(明治三十三年)、治安維持法(大正十四年)、大政翼賛会(昭和十七年)等々を通じ思想統制し(子どもにはわからなかった。大部分の国民も)教育を通じ、徹底的な軍国主義を鼓吹された今になってその恐ろしさにおののく。

私も昭和十九年六月一日、三山木駅頭で、「これから天皇陛下のために忠義を尽しに行つて参ります。後に残った家族は、村長さんはじめ、在郷軍人、隣組の方々に何かとお世話になりますますがよろしくお願いします。

海行かば水漬くかばね、山行かば草むすかばね 大君の辺こそ死なめ かえりみはせじ。みなさん、お見送りありがとうございます。では行って参ります。」みんなこのような挨拶をして、国防婦人会はじめ、村人に別れを告げて、万才万才の声で故郷をあとにしたものだ。

伏見歩兵第三七部隊に入隊したが、大部分の友は帰らぬ人となってしまった。

正義のための戦争、そんなものは無い。平和、何が無くても先ず平和、平和に優る尊いものは無い。

今は亡き多くの友を偲び、その冥福と平和を祈る。

(三山木在住)

宿直室の壁に穴

安岡 小福(七)

戦中戦後を生き抜いて来た私達、校庭を畑にして大豆をまき、荒地を耕やして蕎麦を植えた。頭上すれすれに敵艦載機が大きい音を立てて飛来した。あの時は本当に怖かった。運動場の南側が氏神様、その当りを二人ずつ肥桶を運んでいたのです。その場に肥桶をおいてみんなお宮の森に小さくなり息をひそめていました。高等科の生徒や男の先生方は遠い貴谷の農場へ行ってられ、六年生の女子と私だけ、本当に心細かった。何分たったか知らない。音が止んで生き返った心地がしたものだ。

ある月曜日、出勤したら宿直室の壁に大きい穴が空いていた。敵の機銃掃射とのこと、当直の先生はさぞ怖かったことと思う。こんな田舎まで敵機が来たのです。

B 29が右へ左へと降りて来た時は頭の上に落ちるのではないかと、二歳の我が子とろろろしていた。東の方へ去って行ったので一安心して出勤した。そのB 29は木津川の草内の浜へ落ち、お茶の芽運びさんが天秤棒で追いかけられたとか聞いたが、勤めを終えてから川原まで見に行ったものです。黒こげになったB 29の残骸、落下傘で降りた米兵は憲兵に連行されたとか、右左と向きを変えたのは、着陸出来る所を探していたのだそうだ。

ささやかな抵抗、竹槍訓練、小学校の講堂には飛行機が疎開してあった。

終戦後のいつ頃だったか、環状線に乗った時一面黒こげの街が目飛び込んだ。これが大阪空襲の跡かと驚いたものだ。広島にも長崎にも行ったけど戦争は絶

対にやっではならない。人間が人間を殺戮し合うなんてこと!!

昨年は掃海艦が機雷の処理に奮闘して下さって、本当に有難うございました。

私が田辺町へ来た時は村も町も戦争一色、二人の倅せも束の間、長男出産後八月に応召五月ほどして面会の通知が来た。「この炎暑に、こんな小さい子を(生後五十日)連れて行つては駄目」という産婆さんのことは、そのとおりと子供は家に残して行つた。「大勢来なくても子供さえ連れて来たらよい。」と主人は一瞬がっかりしたようす。誰よりも子供を見なかったのでしょう。面会後私達を本願寺に残し、まっすぐ北支太原へ向かったのです。その後沖繩へ転戦しましたが、ご存知の通り取りつ取られつの激戦で戦死。実の兄もビルマ戦線で亡くなっています。身内を亡くされたお連れは沢山あった。何としても生き抜かねばとお互いに力になり合つて頑張つて来たのです。

いったいあの戦争は何だったのでしょうか。挙国一致・

聖戦ということは疑いませんでした。今日中国侵略といふことが顔を出していますが、亡くなった兵隊さん、残された私達は何と受け止めればよいのでしょうか。近隣諸国の政府や野党・マスコミに遠慮して、靖国参拝もされない総理には、齒がゆい思いがつのるばかりです。

火事場泥棒の如く敗戦実際に不可侵条約を破つて満洲に侵入し北方四島まで占領した旧ソ連は何という国でしょう。占領軍が来たら婦女子は何か……。そんな心配もなく核の傘下で復興に専念出来たことは不幸中の幸です。

そもそも人間の歴史は戦争の歴史とでもいいでしょうか。地図は何国も塗り替えられて来ました。近世では亜細亜に独立国が幾つありましたか。殆ど欧州諸国に侵略されていたのです。日本人でありながら日本を悪くいう人の愚かさは困つたもの。正しい歴史を知り、正々堂々ものをいい、国のために尽くした英霊を泣かさないようにして行きたいものです。

終戦二十五周年、昭和四十五年に府の主催で沖繩へ参りました。海が荒れているとので航路を変更、瀬戸内海を西へ進み四国と九州の間を南下したのですが、太平洋に出てからの波の静かき、英霊に守られているかのようでした。満月を仰いでの洋上慰霊祭。あの時の感激は今も忘れることは出来ません。当局の皆様本当に有難うございました。

(田辺在住)

戦争と梅

吉 本 千代子 (六三)

戦争のために切り倒さなかった。何本かの老梅が今年も花を咲かせている。

戦争と梅、なんの関係も無いように思われるでしょうが、私の生家のように、梅で生計を立てていた者には、大へなことだった。

昭和十七年頃だったと思う、梅の実が、グリーンピースぐらいの大きさになった頃。憲兵がやって来て、梅の実は、軍需品だから一つぶの実も人に売ってはいけない。あげてもいけない、全部軍に供出するように、軍から塩は何俵か送るから、その分は、梅ぼしにして

出すことと、厳しいきまりを、言い渡され、それに、只のような安い値段で、村役場まで運んで行くのです。戦争もいつまで続くかわからず、こんなこと何年もしていては一家は食って行かれない、と、父は腹を立て、何十年も手塩に、かけて育てて来た梅の木を切り倒し、一面のさつま芋畑と、化してしまった。ところがその翌年終戦。泣くにも泣けず野菜物じゃなし、一年や、五年で梅は実る物じゃなし。一人息子の兄は海軍で戦死、寂しそうに芋畑に立たずんでいた今は亡き父母の姿を私は忘れることは出来ない。

(三山木在住)

学徒動員

衣 川 ツマ子 (六二)

街は車であふれ、店頭には商品があふれる昨今。使い捨て時代、乗り捨て時代だと、新しいものを買っては、次々と捨てて行く人達もいる。戦時中だった私の若い頃は、お金があっても品物が無く、食料品も配給制度だった。衣料品も一人何点と、家族の人数により配布された衣料切符の時代。でも品物は何もありません。

一番残念だったことは、家業を犠牲にしたことです。高等小学校の高等科二年の時。転校したのが枚方市の氷室小学校でした。校長先生が軍国主義のコチコチ頭

の先生で、何でもお国のためと、田舎の学校で僅か八個あったラップも、軍隊に提供してしまうような人でした。各地区毎に男子生徒がラップを自宅に持ち帰り、朝六時には小高い丘の上から、起床ラップが鳴り渡り、八時五分前に集合ラップ、集団登校もラップに歩調を合せての毎日。都会育ちの私には物珍らしく、楽しい学校生活でしたが、二か月授業を受けただけで、六月から学徒動員として、今は津田病院のある所ですが、津田の小鹿革工場に毎日通うようになりました。ドンゴロスのような荒い織り方の、作業服を支給されて、それを着て毎朝学校に集合。先生の引率で工場に向い、夕方また学校に帰ってきて解散。あの頃「月火水木金金」と唄にも歌われていましたが、お正月三ヶ日が休みだけで、日曜日夏休みも返上、炎暑の日も雪の日も頑張ったものです。

昭和十九年から二十年にかけてはよく雪の降った年で、底のすりへった靴を履き、何度もすべって転びながら工場に通ったことが、今もはつきり脳裡にやきつ

いています。作業は飛行機のプロペラのところにつけるパッキンを、一針一針縫いつけて作るんです。細長いアコーデオンのような筒です。どんなに頑張っても一日二個ぐらいいしか出来ません。黒い革で縫いにくいのを割り当てられたら、能率はぜんぜん上りません。若いから出来たもので、今だったら目が霞んで仕事にならないだろうと思います。お喋りしては先生に叱られました。今の中学二年生ですものね。可愛い産業戦士でした。昼食は工場から出ますが、私達農家出身では食べられません。バサバサの外米に、馬や牛の餌だった大豆や豆粕を交ぜたご飯です。各班毎にバケツにスコップを入れて計っています。びっくりしましたが、沢山の量ですものね。空の弁当箱に食器のご飯を入れ替えて、にわとりを持って帰りました。時々糠臭いクッキーのようなおやつを頂きましたが、それにもわたりの餌です。今、土筆の出る頃になると、当時お弁当のおかずは土筆を味付して、ご飯の上に乗せて持つて行ったことを思い出します。若い土筆はご飯が緑

色で、たけたのは黄色に染まっていました。私達農家のものは、主食は麦を交ぜたくらいのご飯でしたが、副食は山菜や野菜ばかり、いなごの佃煮や沢蟹をたっぷりにして食べた人もあります。今は何もかも満ち足りた生活。平和な世の中に、私は時々怖くなる時があります。何時かまた昔のような時が来はしないかと。でもお互いが自然をこわさず感謝の気持で、平和な時を楽しみ過したいと願っています。

(三山木在住)

第二次大戦と私

水山 春男 (六)

私は第二次大戦の折には、最後の軍人として二十年八月八日入隊しました。この二日前には広島に原子爆弾が落され、当時の新聞では、新型のセメント爆弾が落されたが、被害は軽微である。敵も資源が少なくなつたので、このような爆弾を落したのであるというように新聞に書かれていました。

二十年の春先からは空襲が毎日のようにあり、頼みの沖縄戦にも敗れ、やがて本土に敵が上陸するであろうと、思われていた頃でありました。食べるものも充分には手に入らないようになり、戦争一色になり、農

家では十八年の春頃から米の供出がいわれだし、始めは食べる分だけを残して、余分な米は全部出していました。家が、家で食べる分をなんとかへらして、いくらかを出すように強要されましたが、当時は今のように米の収穫量も多くなく、ましてや私達の区のような山間部の農家では大変苦労したもので、このようなことから保有米を全部出してしまい、配給米をもらうということまでしてきました。幸い農家では四季折々の野菜があり、その時々の野菜が、さつま芋になり、また、馬鈴薯になったり、時には豆類になったりで、これ等のものを主食がわりに食べたもので、少量の米を入れて、大半はこれ等の野菜を入れて雑炊にして食べていたので、農家でもいろいろあって、食べることが楽な家もあったようであるが大半の人達は日々の食べ物には大変苦労をしたものであります。

私は十六年の十二月から国鉄の輸送関係の会社に勤めていたので、当時の国鉄の様子などを記してみたいと思います。十九年頃からは男子の多くは、兵隊にい

つていましたので駅長さん、助役さんを除いては大多数が女子の職員でしていました。列車の車掌さん等も次々に女子の車掌さんとなっていき、戦いがし烈になるにつれ、毎日の通勤者を除いて、乗車制限がなされるようになり、一列車に各駅何人という決定がなされていて、公用の外は何処へ行くにも大変で、切符売場の窓口で列んでいても、指定の人数になれば売場の窓口が閉ざされて、次の列車まで待たされたものです。遠くへ行く時は大変な苦勞でした。四国や九州方面へ行きたくても片町線の小さな駅では切符の割当はなく、駅から大阪市内の駅に早くから申し込んでもらって切符を手に入れたものです。また貨物も例外でなく、一般貨物は制限せられ、軍の物資が優先的に扱われ、河越荷物を送るには大変な日数がかかる有様でした。

十九年から二十年にはあらゆる物資の疎開があらゆる方法で田舎に運ばれてきました。自動車は勿論のこと、牛車等もかり出され小学校の講堂や駅の近くの倉庫等に物資が搬入されていました。その頃の自動車と

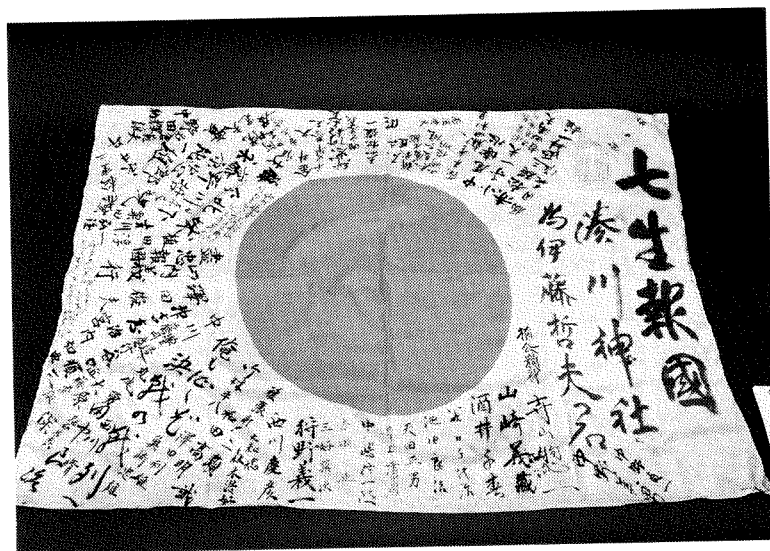
いえば全部というほど木炭車で、木炭を炉の中に鉄棒で、つつき入れ、炉の下部で「ファン」を廻しながら、煙の色を見て、炉の蓋を閉じてエンジンをかけるのですが「クランク」してエンジンをかけけるには大変な力の入ることなので、多くは坂の上に止めて、準備が終り次第、坂を下り乍らエンジンを始動させていたもので、現代とくらべてみて隔世の感があります。

二十年の三月を過ぎる頃から空襲が激しくなり、大阪方面に度たびB29による爆撃を受けるようになります。片町線の京橋の附近だったろうと思いますが、列車を直撃され、車掌さんが亡くなられたが、その前日に話を交していた人だったのでよけいに思い出されます。空襲が激しくなってくるとこのようなことが度々見聞きするようになりました。今日元気で働いていても明日はどうなることやら、皆んながこのような気持ちです。ごしていただいたものです。

このような悲しい戦争の体験は私達だけで結構です。二度とこのようなことのないように祈りたい気持ちで一

杯です。いつまでもいつまでも平和な日々が続きますようにと祈念しながら筆をおきます。

(三山木在住)



日の丸の寄せ書。千人針同様、多くの人の願いがこめられていた。

戦争の記憶

記事にならなかった戦争秘話

玉井 正(八)

(1) 陸軍病院の閉鎖

陸軍病院とは、軍直轄部隊で、常時数千の患者を収容し、内地帰還と戦線復帰の分岐点であった。私はインパール作戦で負傷し、サイゴン陸軍病院に入院、療養中の出来事である。昭和十九年七月インパール作戦に破れた大本営は、名譽挽回とビルマ奪還を謀り、病院を閉鎖し、入院中の患者を再び戦線に送ったのである。

昭和十九年暮れ、病院長は、担送患者を除く、全員に集合を命じ、「レイテには米軍が上陸し、ビルマには

英印軍が降下し、内地からの補充は一兵もない、現兵力を以て、ビルマ奪還作戦を敢行することになった。

諸君は直ちに元隊に復帰し、片手の者は手一本の、片足の者は足一本の、ご奉行をしてくれ」と涙ながらの訓示があった。片手を首に吊る者、松葉杖の者、いたいたしくも、哀れな姿で、サイゴンを後にしたのである。十分歩き、五分休憩、行軍は遅々として進まず、

バンコクまで数か月を要した。バンコク兵たん病院の軍医は、この状態をみて、銃を持ってない者が戦線へ行っても、ご奉行は出来ない。かえって足手まといになる。只今から軍医が診断をする。元隊復帰可能と認めた者は戦線へ、他の者は今暫く、バンコクで養生した方がよいと思う。この処置は軍医の独断である、異議ある者は申し出よ。ほとんどの者は異議を申し出て、戦線復帰の一日も遅いことを願ったのである。元気な者は、戦線に近い部隊から、敗走中の元隊に追及したが、一人として生還した者はなかった。私は元隊がカシオニアに、転進中であつたため、バンコクに残り、

前線へ物資輸送に従事中終戦となり、万死に一生を得たのである。戦況不利といえども、病人を戦線に送った、大本営の処置は、日本建軍七十八年の軍史になく、後世の批判を仰ぐべく、あえて記事とした次第である。

(2) 捕虜が再び捕虜に

終戦後、私の部隊はブノンペンに集結した。武装解除を受けた後、昭和二十年末から、乗船地サイゴンまで、行軍による移動を、開始したのである。酷暑のため、早朝二十キロを目標に、サイゴンまでの、キロポストを数えながらの行軍であった。ある日、安南独立義勇軍と称する部隊に包囲され、再び捕虜となった。筆談により、「盟邦破れたりと言えども、我々は祖国独立のため、最後の一兵まで、戦う決意である。応援してくれ」とのことであった。これを聞いた部隊長は、戦いに破れたりと言えども、大元帥陛下の命により、行動しているのです、ご意思に添うことは出来ぬと断った。では致し方ない、携行の小銃は、全部頂きますと、没収された。小銃は警備のため、三十人に一銃の割り

で、借用したものである。数日の後サイゴン街道まで案内してくれた。再捕虜中は、取り扱いも丁重で、給与もよかった。それもそのはず、義勇軍と称する部隊は、某憲兵大尉が指揮をとり、主力は日本軍の逃亡兵であった。

(3) 捕虜が討伐戦に参加

反乱軍の妨害が激しく、前途行軍不能の状態となった。英印軍は武装解除した兵器を、再び捕虜に貸与し、反乱軍の討伐を、命じたのである。命を受けた大隊長は、部下全員を、内地に復員させたい一念から、偽装戦闘を計画したのである。目的地に到着するや、部下一名を従え、敵陣に突入、反乱軍指揮者と面接、討伐戦について、細部の打合せをしたのである。

督戦英軍将校の眼前において、攻撃命令は下され、敵陣地を占領、偽装作戦は見事成功したのである。双方に損害なく、借用の兵器は、全部反乱軍に献上し、丸腰で悠々引き上げたのである。その後大隊長は反乱軍に走り、数千の部下を指揮し、ゲリラ戦に活躍中

あったが、停戦協定締結により、任務終了、司令官の許可を得て、全員元隊に復帰、内地に帰還できたのである。青年大隊長のとった、応変の処置に、敬意を表すると共に、今尚大分県にご健在の、隊長の長寿を祈る者である。

(薪 在住)

戦争中本当にあったこと

坂本好子(六五)

思い出せば、昭和二十年五月の終り頃、お茶つみの最中私は二十歳で友達や、お姉さんと、草内の木津川のほとりで、お茶をつんでおりました。その時空襲のサイレンが鳴りひびきました。それから五分もたたない内にB 29が三機ずつ編隊を組んで九機とんで来ました。その中の一機が煙をふいています。

日本の艦載機が煙をふいた一機を追いかけるようにとんでいます。村の上で落ちるか木津川の上へ落ちるか、わかりません。誰もお茶をつんでいる人はありません。皆んな無言で、こものはっている茶園の中で右

往左往しています。ごうごうと腹の底をえぐるような爆音がだんだん高くなって来ます。私はちよつと空を見ました。煙のふいている、飛行機からパッパッと4つ白いキャメルのような物が落ちました。それから、あまりのこう音で何もわかりません。これで私もB 29の飛行機の下じきになり死んで行くのだと思いました。後は、なむあみだ仏、なむあみだ仏と言いがら、お茶の木にしがみついていた。その時、雷が百も落ちたかと思った。「ずうーどーん」と地ひびきがして、百米ほど先でB 29が木津川の川原の上へ落ちました。目の前で見えたあの時の砂と火煙、天高く舞上りました。私は一生忘れることが出来ません。私は茶園の中から、先のキャメルは、何だったんだろうと思って堤防の方を見ました、それは落下傘で、アメリカの兵隊さんが、カジを取りながらゆつくりと堤防の上へ降りてこられました。私はこわかった。もう二人三人堤防に誰かがいました。私もお姉さんもお友達もいっしょに見に行きました。その時兵隊さんは

ピストルを、私達にむけました。こわかった。こわかった。ピストルの色は油じんだコイ栗色でした。初めて見たアメリカの飛行士のお方は七十歳のおじいさんと思いましたが私は知らなんだ。そのお方は金髪でした。二十歳くらいの方だったそうです。こんな戦争の想い出があります。けれどあまり誰にも言いたくなかった。自分の心の底にしまっておりました。けれどあれから四十六年が過ぎ平和になってもう昔のおとき話として書くかと思いました。

今私の家の近くに同志社の下宿があります。そこで日本の青年とアメリカの青年が仲よく遊んだり、勉強したりしておられます。今思い出せば私達の二十歳の時は地獄のどん底でした。もう二度と戦争はこりごりでございます。いつまでも、いつまでも平和でありますようにお願い致します。世界の人々と手を取り合って仲よく暮らして行きたいと思っています。

(草内在住)

戦さを越えるもの

家村 禎 三(七)

その日は折り悪しく時化のあとで、波は高く、私の乗っている船は、激しく波にもまれながら、日本海を時速十二ノットで北上していた。ふと眼をさました私に、船窓から外を見ると、夜中だというのに、いつになく無線室が明るくて、ざわめいている。耳を傾けて聞いてみると、盛に「SOS」を打って来ているところだった。このニュースは、ただちに船内に伝わり、オール・スタンバイの命令が船長から出た。

遭難船は『気比丸』という名の船で、日本と朝鮮との定期船である。その船から「触雷したから、すぐ助

けに来てくれ」という無電なのだ。私たちの船から遭難地点まで約六十マイルの距離がある。時間にして五時間かかる。

現場に到着した時は、未だ夜も明けやらず発見は困難であった。日本海の冬は初冬でもかなり寒い。全員が冬支度をして、甲板に目白押しに並んで探索に努めているうちに、夜は白々と明けて、水平線が肉眼でも見えるようになった。見張役の水夫が、マストの見張台にあがった。それから一時間程も経過したであろうか、突然、見張りの水夫が大声を出して、水平線を指さした。「ボート発見、右舷十度の方角。四隻のボートが互いに継ぎ合っています。手旗を振っています」歓声が、どっと甲板上に流れた。

私たちの船は、あらん限りの音で汽笛を鳴らして、確認したことを相手のボートに知らせた。海上遭難の一番ドラマチックな時である。海員学校を出て、未だ間のなかった私は、もうこの感動で泣いてしまった。高波からボートを庇うようにして救助が始まった。

舷側にロープを何本もたらし、ひとりで上られる者は、それをよじ登らせた。が、ほとんどの者は、体力も気力も失っていて、私たちが一人一人を引き上げなければならなかった。ボートの中の浸水は激しく、まるで湯槽の中に、着のみのままでつかっているようであった。ボートの中の人はずべて顔色が青い。そして体は電流を通されたように、大きくふるえていた。

母親に抱かれて、死んだようになっていた幼い子供もいた。乳呑児もいた。助けあげてみると、既に死んでしまっている子供もいた。それだけではない。寒い一夜を海上で、恐怖と不安に襲われながら過して、今、救われるというその時になって、海中に没した人もいた。

一発の機雷が、無防備な商船を撃沈させ、罪のない非戦闘員が、生地獄の中で、一蓮托生の惨劇の真只中へほうり出されているのである。十八歳の多感な少年であった私は、一人一人助け上げながら泣き続けた。涙は茫沱と頬を伝っていた。救助が終わってから、軍から緘口令が出た。これで遭難の大悲劇は葬られた。気

比丸のこの遭難は、戦後、世界海難史の中に、その一駒として載せられた。

タイタニック号にも劣らぬ死者を出しているのである。四百名を越える船客の半数が、帰らぬ人となった。船には国籍の異なる人もいた。しかしこれらの人たちは、互いに国籍や国境を越えて助け合い、励まし合って救助を待ったのである。

それから五十年がすぎて、私は今、老人ホームで安楽に余生をすごさせて貰っている。しかし、そんな私にも「運命共同体」などという、不気味な言葉がはいって来るのだ。第一次大戦後、今日に至るまで、未だに真の平和は何処の国にも来ていない。衣の下縫いが見える政治は腐敗している。「核」の恐怖は私たちから去ってはいかない。気比丸が触雷したように、私たちの頭上にもっと怖いものが降りかかって来るかも知れない。多くの人を死に至らしめた気比丸は、今日の私たちに何かを語ってはいないだろうか。

(大住在住)

B 29が飯岡村上空で撃墜されたこと

米 田 修 藏 (七三)

昭和二十年六月五日午前八時三十分頃、大阪の上空からブーンという爆音が聞こえてきた。戦争も激しくなり敵機襲来もおかしくない情勢下にあったので、空襲が始まったのかなと心の引き緊まる思いであった。小高い丘の飯岡からは、家にさえざられ余程上空にさしかからないと、飛行機の姿を見ることができない。私は爆音の聞こえてくる方向に、ジーンと耳をすましている。編隊のB 29が西の上空に姿を見せたのである。高度一万五千米の高さで同じ速度でゆっくりと飛ぶB 29は雄大である。私はもしここで一発の爆弾が、この

村へ落とされたらと思うと身の毛もよだつ恐怖心におそわれた。すると、どこからともなく日本の戦闘機二機が姿を見せ、B 29めがけて突進して行ったのである。B 29とくらべるとまるで米粒のような日本の戦闘機を見て思わず胸に熱いものがこみ上げて来た。日本の戦闘機は互いに示し合わせたようにB 29一機を目標に集中攻撃を加えにかかったのである。それも米粒のような日本の戦闘機がB 29の巨大な編隊の合間を縫うように、健気にも上か下へ、下から上へと急旋回し、前後左右を問わずB 29めがけて撃ちまくった。しばらく見ているとB 29の一機からパット黒い煙をはいたのである。私は思わずやったと思ったが、そのB 29は編隊からそれることもなく煙をはきながら、ゆうゆうと飛行を続けた。日本の戦闘機はこれを見て、これでもかとB 29に向って撃ちまくった。そのかいあって遂にB 29一機は編隊飛行を断念し編隊から外れて下降し始めた。日本の戦闘機は煙をはいたB 29を尚も執拗に追いつつも先の編隊が気になるのか、B 29一機の煙の大きな

って行くのを見とどけ東の方へと飛び去った。後に残った日本の戦闘機は煙をはいたB 29めがけて尚も銃撃を加え、これ以上攻撃を加える必要がないと思ったのか、飯岡の上空を勝ちほこったように二回旋回し東の空へと飛び去った。

煙をはいたB 29はぐんぐんと高度を下げ木津川の堤防を目標に着陸を試みようとして、低空飛行をしては断念し上空へ舞い上がり、再び玉水橋下流の砂原を目標に着陸しようと低空飛行を試みては断念し、遂に上空高く舞い上がった。私が飯岡村から遠ざかるに違いないと思っていると、機首を急に北方に急旋回し、内藤さんの屋根すれすれに突込むように低空飛行してきたのである。私は思わず危ない私の家が直撃されると腰をかめると、そのまま北へ飛んだ。わたしはああやれやれと思っていると再び南へ機首を向け急旋回し、再び内藤さんの屋根から私の屋根すれすれに北へ飛んだと思うと高度をぐんぐん上げ、木津川上空にさしかかった。すると間もなく落下傘がパツと開き一人の乗

員が青谷村の山林方向に落ちて行った。そしてまた落下傘が開き一人の乗員は草内村の渡し場方向に落ちて行った。B 29はこれ以上駄目だと思ったのか高度を斜めにぐんぐん下げ、木津川の砂原にそって落ちて行った。村人達はそれを見てB 29が落ちたと声を掛けながら、竹槍を持つ人、くわをかつぐ人達が木津川の堤防を、あるいは農道を突走ったのである。私も墜落した方向の草内村の渡し場あたりを目標に普賢寺川の堤を走った。すると青谷側の向う岸の砂原に機首を砂の中に突込み、尾翼を上にあげ煙をはいっているB 29が見えた。そして何回か爆発が起こりその度に黒い煙と炎が空高く上がった。飛び降りた乗員は草内の渡し場より少し南あたりの堤めがけてふらりふわりと落下傘を操りながら降りて来た。村人達は遠巻きに警戒して見ていると乗員は観念したのか、平静で笑いさえ見せていた。すると田辺の方からジープが走って来て乗員を乗せ元の道へ帰って行った。

今四十数年前の光景を思い出すにつけ民族の如何を

問わず、戦争とい悲劇のために多くの方々が犠牲になられたことを思えば戦争は愚かであったと思わざるを得ない、この悲劇を再び繰り返すことのないよう平和が永遠に続くことを願ってやみません。

(草内在住)



戦争末期、人手不足から多くの学生が勤労奉仕に従事した。

銃後の守り

西村 修 (六)

「昭和十六年十二月八日、未明米英と戦闘状態に入れり」このニュースは、ちょうど小学校(田辺)の校庭で遊んでいる折、ふと教員室のラジオから流れたもので、一瞬、その時、飛び上って喜んだ記憶があります。子供時代よく戦争ごっこをしていた頃故、しかし異様な感動をおぼえたのも事実です(戦争は勝つか負けるかの二つに一つしかない)、それからというのは、真珠湾攻撃から毎日のように勝利のニュースが報道されてきました。いよいよ戦争が拡大され激しくなるにつれ軍国主義一色にぬりつぶされ、大政翼賛会が

生れ国家総動員令が発令されるに至る。上空には、B29の飛来で飛行雲を作って彼岸の方へと去っていく姿もその頃でした。ちょうど学校の生徒時代であった私は戦時体制下におかれていたので、軍事教練に明け暮れていました。鬼のような教官(配属将校)、教練教師の下、厳しい訓練が課せられていた。つらかった夜間行軍と厳冬の渡河作戦敢行、凍るような冷たい水の中(木津川)をけちらしてしかも銃を頭上に位置して向う岸にたどり着く、身体全体がびしょぬれ。戦場の兵士を思え、親兄弟が国のために尽していると激怒する教官、苦しみにあたえることを教えられた。府下中等学校秋期合同大演習にも参加しました。

昭和十九年ともなれば戦況は不利な状況となり学校も繰り上げ卒業の実施や勤労動員にかり出されるようになる。私達も学徒動員として祝園部隊(精華町)へ派遣、火薬詰めや木枠詰め作業を、又女性や老人ばかりとなった百姓への手伝い。田の草とりも、冬は湿田の暗拒排水作業に明け暮れたこともありました。学校

の勉強は省略され、英語（敵国語）は廃止されるという銃後の守りは益々厳しさを増してきました。

昭和二十年になると私の兄三人とも兵隊にとられ留守を助けるために農業を手伝っていました。老いた親といっしょに田畑を耕すようになったのです。食糧不足も深刻になって毎日のように都会からの買い出し婦人が畑に忍び込んで芋などを買いあさり、衣類その他との物々交換。警察の目をくぐって帰途につく背中に背負った荷物、「女は強い」この時につくづくと感じさせられた。食い物には必死だと感じた。また一方経済面では統制経済下におかれ、生活用品は配給制度へと移行、酒タバコは、お祝いごとになると特配をうけるようで、強権発動あり、厳しい米の供出制度が強いれられてきた。召集令状（赤紙）は毎日のように出征兵士を見送る姿も日課のようになってきた。逆に日増しに戦死者の公報や遺骨の迎えがawatadしくなる。本土決戦が叫ばれる頃、B29は毎日のように悠々と飛んでくる。その間隙をぬって艦載機は無差別に機銃

掃射をあげせ、大久保飛行場を集中攻撃が目の前で行なわれてくる。JR田辺駅や、河原の民家への機銃掃射も再三にわたり恐怖におそわれた。そうしたことから本土決戦ムードも益々高まってきたのは徴兵検査の適令年令に達しない人や、兵隊に採用されない中年を対象に郷土防衛隊が組織され、私もその一員に加えられたのです（宇治田原、井手、田辺、八幡の各町で構成）、訓練は実戦型の対戦車戦法と竹槍（銃の代用品）での毎日を田辺小学校の運動場で、一等兵（陸軍）の階級をもらって激しく厳しい教育が施された。全員が帰宅を許されることがなく集団活動を強いれた。食事はツブし麦とじゃが芋の混ぜご飯が主体で私など胃腸の弱い者は苦しい日常生活でした。

私は最近、鹿児島県の知覚へ陸軍特別攻撃隊基地と「鹿屋（海軍神風特攻隊基地）」を訪れ学徒出陣や十七歳前後の少年が喜んで死んでいったが改めて戦争遂行の手段に過ぎなかったと思えば残念です。多くの戦争犠牲者の方々に対し黙とうをささげご冥福をお祈り申し

上げます。今日の平和があるのも戦争のために尽くした人々の上に成り立っていることを思えば、真の平和がいかに大切かを教えられたと思います。世界平和のために頑張ろう！

（河原在住）

徴用船員の戦争体験記

中野 正満 (七)

右四十五度雷跡面舵一杯

この体験記は四十五年を経ておりますので日時等は忘れており失礼ながら御容赦下さい。

私は昭和十一年四月に商船学校航海科の全科を卒業、海技免状を取得後、昭和二十二年まで商船士官として勤務しました。大東亜戦争の開戦は海南島で鉄鉱石を満載し、出港待ちの十二月六日ラジオニュースで知りました。

私達船員の身柄は昭和十七年五月二十二日に戦時海運管理令第十八条の規定により徴用（徴用番号―門徴

乗船）

当時の航海の状況は、内地―台湾間は御用船の船団がある時はその船団に加えて貰って航海相互間の距離間隔は二百m―三百m時には百―二百台湾から海南島間は単独航海。船団の無い時は往航内地―南西諸島扱い―台湾―直行―海南島復航は海南島―直航―台湾―支那沿岸沿い北上、上海沖から朝鮮南岸經由―内地。

会社船で支那沿岸を北上中沖合航行中のジャンク船（支那の帆船）の陰から発射された敵潜の魚雷により船と船員が海の藻屑と消えたことがありました。単独航海中は見張を倍増し夜間は厳重な灯火管制で室内は蒸し風呂、煙突の煙は極力薄く肉眼と心眼に頼って航海します。（心眼は水平線の影まで見えます）針の延の上を歩くとはこのことです。

では雷撃による沈没から救出されるまでの状況に移ります。

昭和十九年九月〇日門司港で南方派遣の陸軍兵〇名と軍需物資会社用物資を搭載（兵と軍需物資も運賃輸

第二五二号）これでしたが、戦時中船は陸海軍の御用船にはなりませんので軍属としての経歴はありません。体験記記載中の船は「ぼとぼは九五五四総屯」の新造船で職務は一等運転士（現行の二等航海士）でした。

船は沈没するまで八幡港と海南島間を鉄鉱石の輸送に従事していました。

民間船で徴用船員が如何なる戦争体験をしたかその一部である昭和十九年九月二十七日敵潜水艦の魚雷攻撃を受け沈没し、その後救出されるまでを記憶を辿って書いてみます。

配給物資は船員としての配給で、陸上より少し良かったと思います。航海は前記のとおり八幡―台湾經由―海南島往復で単独航海が多かったので対潜水艦用として船尾甲板上に砲（口径は忘れましたが）対飛行用として船橋上甲板に二十五ミリ機銃一門があり、これを作する海軍の兵三名が乗船しておりました。（兵は最初の内は内地―台湾間危険になった十八年末頃より常時

送―御用船でないから）船団を編成して六連島沖を出港、南西諸島沿いに南下〇日無事に台湾基隆港に到着、そこで食糧水等を搭載二泊後船団を再編成してフィリッピンマニラ向け出港、当時の船団編成は七隻で二列縦隊各船間の距離間隔は200m―300mバシー海峡を一路南下戦況は一段と悪化して来たので、ルソン島北端に到着するまで昼夜連続文字運動航行でした。（これは敵潜の攻撃を避けるため）。

九月二十六日朝ルソン島最北端アパリ沖に到着しました。これからマニラまでのルソン島沿岸は最危険海域との情報によりアパリで全船各船のボートで兵員とその食糧を上陸せしめました各船作業終了時を期して船団は抜錨夕方隣のバンギ湾に到着仮泊しました。この湾は沖合に向って何の防衛も出来ないもので二十七日早朝全船抜錨船団を編成して沿岸沿いに一路マニラ向け航行を開始しました。その時の船団の隊形は上空に警戒機十三機飛行中当日の正午中船橋の見張員が魚雷発射時に出来る水面の脹らみを発見して「右四十五度

魚雷と報告引き続き雷跡発見と報告があったので当直士官は直ちに面舵一杯（ハードスターボード）全速令しました。船が右に回頭中に三本の雷跡が見えた。

船首が約30度右に回頭した時に前の雷跡と二番目の雷跡は白く見え船首前方を通過しました。一番右側の魚雷が四番船艙で爆発しましたが、積荷が粘土であり本船は新造で外板も隔壁も普通より厚かったので沈没は免れて浮いておりました。約一時間かそれ以上過ぎた頃4番船が現場に帰って来て曳航救助作業が始まり本船を陸岸に向って曳航を始めました。（本船からもマニラまで曳航は不可途中で沈没と両船とも第2の被雷の危険があるので要請による）三時頃バンギー湾の岸近くで本船の船尾が海底についたので曳航を打ち切り四番船は任務に復帰しました。（本船と乗組は残したまま）。

本船は錨を下し、乗組員全員集合協議の結果食糧寝具衣類（必要だけ）を持ってボートで上陸し露営覚悟で救助を待つことにしました。（船が完全に沈没するま

でに必要物資は順次陸上に持って上ることにした）。

上陸した日は海岸の砂の上に毛布一枚敷いて寝ましたが、直射日光で焼けた水は熱くて眠れませんでした。が、夜半頃より沖から吹く風は涼しいが砂は冷え切って寒くてまたまた眠れません。

これから救出されるまで約一ヶ月露草と寝食することになります。幸い近くに空校舎がありましたので、その二教室で雨露を凌ぐことにしました。近くに陸軍の駐屯部隊約二十名程おりましたので救出方を依頼しましたが、私達は軍属でありませんので、梨の礫で何の応答もありませんが、警乗していた水兵さん三名は早急に引きとられました。悲しいかなみなし子の徴用船員であります。船橋上の二十五ミリ機銃も分解して陸に上げ海岸に沖からの攻撃に備えましたがこれも駐屯兵に持ってゆかれました。残されたのは料理用包丁のみ持った私達です。食事は船から上げてきた米を鍋で朝は粥一杯夕は握り飯一個副食物は汁（味噌のあ

一番船艙から揚げて来た缶詰（軍需品中手紙と自転車は駐屯隊に渡しました）。

いよいよ副食が欠乏すると海岸で小カニを取る、土着人の飼犬まで食べました。腰には何時もかん詰め

の空缶（茶碗の代り）ひもでくくった竹箸がぶら下がっておりました。仮寝中船では一等運転士（私）が医師の代りも務めておりましたので、その薬品で土着の人の傷や腹痛を治してやり、夜食のゴチソウにあずかったことも、差入れを受けた事もありました。（差入れ物品は共有物です：（船員は上下とも皆一つ家族で団結している良き習慣が培れております）。

一か月過ぎた頃にマニラより機帆船が救出にきましたので、全員野営生活に別れを告げてマニラに向い会社の社員寮や社宅で引き上げ船の順番が来るまで少しは楽な生活をしました。本記録はこれで終わります。

マニラから台湾經由内地に帰るまで雷撃で十二時間泳いで救われたこと、高雄大空襲の生活は次回に書きます。

（薪 在住）

姿なき戦い

村井 博(七五)

「諜者は語らず」という鉄則を顧みず、この情報化の時代に少しでも参考になればと万感の思いを秘めて後世への遺言として「姿なき戦い」の一端を述べたいと思います。

私の卒業したスパイ専門の陸軍中野学校では戦術、諜報、偽騙(変装など)、爆破、忍法、語学、護身術、薬物、暗号等を習いましたが、教育の基本は「至誠」であり、大楠公を心の拠り所とし一切の名利を離れ「縁の下(ちからもち)の力持」に甘んずる教育を叩きこまれました。かくて昭和十三年、開校から終戦まで二千二百六十三名

戦意を諜知するよう指示がありました。そこで駐日外国公館員の家族の本国への引き揚げ状況、引き揚げ船における隠しマイクによる談話の盗聴、郵便物の開封、電話の盗聴、暗号の解読等昼夜兼行の日が続きました。駐日外国公館の暗号書はほとんどその盗写に成功しました。命がけのチームワークの賜物です。

昭和十七年六月五日のミッドウェー敗戦の時、ソ連の進攻を大本営は心配していたのですが、その時、私は日魯漁業株式会社の社員になりました。駐日ソ連出先機関の動静をうかがっていました所、モスクワからやって来た伝書使の態度が本国が「累卵(るいらん)の危きにある」ことを反影しており、その他の情報と総合判断し、「ソ連動かず」と大本営へ報告しました。これがヒットニュースとして最高に評価され、我ながら驚き、かつ恐縮した次第でした。

一方国民に対する取締りも峻烈を極め、反戦的、傍観的な要人たちが軽井沢などで密会していたのを床下に潜入し情報を取得していました。これを上司に報告

の秘密戦士が各方面に送り出されたのであります。私は卒業後、「軍事資料部」(昭和十五年新宿区若松町に設立)に入所、我が国に対するスパイ網を察知する任務に就きました。秘密兵器を作っていた登戸研究所や暗号の解読、信書の開封、通信の盗聴などやっていた陸軍特殊情報部と密に連絡をとっていました。この組織は徹底した縦割で、相互遮断のため終戦までお互いに他の業務内容はわからずじまいでした。あの有名な「国際諜報団ゾルゲ事件」についてですが、ゾルゲをはじめブーケリッチやクラウゼンやアンナ、クラウゼン及びそれらとの接触者などかなり突っこんだ情報をキャッチし、動かぬ証拠をも入手し、それを資料部本部長を兼務(この兼務は昭和十八年解除)していた憲兵司令官にそっくり移管しましたので、資料部は永遠に縁の下(ちからもち)の力持に終わっています。開戦前の我が国は世をあげて親独熱にうかされ、「独逸のバスに乗り遅れるな」という形勢であり、敵性国家であった米英蘭等との関係はとみに險悪となって参りましたので、その

すると、これらの要人は二等兵で召集され、玉碎予定地へ送られるという死刑的懲罰処置がとられるので、私はすべて手元で握り潰しました。「これらの要人も国を愛する心には変りはないのだ」と信念で行った我が行為に正しいささかの悔いもなく、むしろ誇りを秘めています。

最後に姿なき戦士の教訓を要約しますと、最も大切な資質は一切の名利を捨て、功を他に譲り、あらゆる拷問にも耐えて累を他に及ぼさず、静かに死んで行く覚悟がないと秘密戦士になれません。戦時中他の者の責任も引き被り自殺用のピストルを恭しく頂き自決した戦士も数多くありました。次に諜報のコツは「先ず近寄れ」です。偵察衛星に頼り過ぎず「足」を以ってかせぐことが大切であります。そして対象について十二分の基礎知識を持つことです。

ミッドウェーの敗戦とガダルカナル撤退を転機として日米は攻守その所を異にし、弱者の戦法たる遊撃戦の展開の必要が生じ、私も昭和十八年十月にラバール

へ転出、第七遊撃隊で高砂義勇兵を混成し、敵中深く敵諜報機関掃討の遊撃戦に当りました。

見守る人もなく異国の土と化した同志、壮烈に花と散った戦友、切々と肉親を思い絞首台に上った戦犯者のことを思うと、「平和」へのさらなる熱願に燃ゆる次第です。

(三山木在住)

私の戦中、戦後

木口 淑 好 (五)

語り継ぐ戦争体験

終戦間際の昭和二十年私は五歳、兄は小学生で学童疎開で叔父の家(大住)に、弟は二歳であった。父は海軍将校でお国のために、ご奉公の真最中。当時私の家は岩国基地のすぐ近くに居していた。来る日も来る日も爆音が轟き、その恐ろしさにおびえていた。防空頭巾をかた時も離さず、いつでも防空壕に入れる状態だった。空襲警報が鳴りその壕に入り身を縮めていたこと、その間に爆撃があり疎開のために荷造りしていたコオリを爆弾がつき抜けていたこと、そして父の戦死の報、私は何もわからなかったが、母は今後如何に

生きるかで涙も出なかったと言う。その日からどれほどの日々が過ぎていたのだろう。戦死した筈の父が帰って来た。母の喜びと驚きは今まで見せることのなかった涙に変わった後になって聞いた。その夜、父に抱かれて見た光景が今だに目に焼きついている。基地で飛行機が燃やされ、炎と煙が天までもときそうであったことが――

私の戦後はその日から始った。食糧難、就職、結婚、主人の突然死、子供のこと……大きな山、川が幾度となく波となつて押しよせて来た。上を見ればキリがない。今は静かに戦後をふり振り返り自分を楽しんで生活している。でも父(八十四歳)の戦後はまだ終わっていない気がする。戦争で目と耳に障害を起こし、両眼は右半分が見えないし補聴機をつけていても大声を出さないと聞こえない。この新年正月三日に父と二人で酒屋神社を経て普賢寺の大御堂までの往復を約三時間かけて歩いた。健康な父であるがその時父は「目と耳が普通の人のようでありたい」と声をふるわせて言った。

戦争がいけないのだ、戦争が父の目と耳を奪ってしまったのだ。私は戦争を憎む。そんな父に何もしてあげることが出来ないが、保養を兼ね年に十回近くの両親二人の旅行が長く続くように陰でソツと支えて行きたい。私達子供のために必死に生きて末た父の戦後が「幸せ」と感じることが出来るように。

(大住在住)

悲惨な戦争への荷担

沖山 恒夫 (七三)

私も支那事変、第二次大戦中、兵として第一線の戦争体験も味わいました。こんな体験は多くの人が綴り語り継がれるでしょう。

田辺町が戦争体験文集を募集されるに当り、特に田辺町にあった体験を記することにした。私は二回に亘り戦場にいた期間を除き国鉄片町線田辺駅に勤務していた。周知の通り現精華町地内に陸軍の弾薬庫が建設され輸送用の専用線(引込線)まで敷設されて、この弾薬の鉄道輸送を田辺駅が所轄担当することになった。庫内の設備進捗と戦争の拡大が併行し連日弾薬の

戦地到達のため港湾への列車輸送が頻度を増していった。大阪港へ神戸港へ呉港へ門司港へと送り出されていったのである。多い日には一昼夜十五屯積貨車九十輦ほど送り出された。しかも鉄道輸送、港湾荷役、兵員移動、輸送船舶、揚陸等々作戦に一貫したものであり、私等の鉄道輸送も軍と上部の命により絶対正確を要求された。ある深夜、弾薬庫(祝園部隊)内で貨車の入換作業を行い発送牽引すべき貨車三十輦を集結したときはすでに発車時刻を過ぎようとしていた。発車時刻にはかり気を取られ線路最奥部に留置していた一輦を連結しないまま引込線より駅まで戻って確認すると一輦足らない、時間的に如何ともし難く大阪港の停車場司令部に連絡一輦不足のまま貨物列車を発車させた。翌朝初列車で実状開陳に司令部に出頭「作戦に支障を来たす」と大目玉を頂戴で済んだのも偶々次の日も同数の輸送があり前日分の一輦を附加して発送できるためであった。この貨車一輦分の弾薬が戦況を左右する量であったかもしれない。こんな失態は希で

あつて田辺駅は全国で数ある弾薬の一つの輸送基地として私等は戦場への輜重隊の任務を担っているとの誇りを感じていた。

残存弾薬も少なくなったであろう頃の昭和二十年敗戦となり、やがて祝園部隊も米軍に接収されその第六三六火薬廠に変身した。そして横須賀港に揚陸された弾薬砲弾が本廠に収納貯蔵されることになり、戦後は戦中とは逆の到着収納輸送が米軍警乗兵士の銃口に晒されながら連日続いた。六三六火薬廠への到着も小康状態となった頃朝鮮戦争が勃発し収納貯蔵された砲弾、弾薬が朝鮮戦線へ補給のため戦中と同じ列車輸送が再び連日不眠不休で開始され六三六火薬廠の米兵員も多数朝鮮戦線へと移動した。朝鮮戦争中はその激しさを物語るかのように砲弾の薬莖が送り返されこれの収容輸送も続いた。

戦争の悲惨さは得てして敗戦国のみが感じるもののように考えられがちであるが戦争である以上戦勝国も同じである。顧りみれば私等の戦場へと輸送した弾薬

砲弾は敵対国の多くの人間を殺戮し、財産や自然を破壊したことであろうか。私等は長年に亘り知らぬ間に悲惨な戦争の殺戮材料輸送でそれに荷担してしまっていたのである。国鉄は輸送の重大な使命を担っており、また講和を忠実に履行する尖端の国鉄の職員であったがために戦争への荷担者になってしまったのである。

そしてその殺戮資材輸送の基地が、我が田辺町内の今姿を変えたJR田辺駅であつことも風化しようとしている。悲惨な戦争後四十余年溢れるような平和の今日再び弾薬輸送はしないと足を洗い田辺駅東側に鎮座する蒸気機関車こそ小さいが戦争中弾薬輸送に活躍したCIJ型の勇姿である。更に六三六火薬廠が我自衛隊に引継がれて関西文化学術研究都市の中央に厳存する。歴史は繰返さないだろうか。職務に忠実であつたが故に悲惨な戦争の殺戮材料輸送で戦争に荷担したことが何となく後目痛い感じと淡い誇りが交錯してくる。

(新 在住)

腰が抜けた

西川 滋 (六五)

昭和二十年(一九四五)三月十六日、晴、友人の東重雄君と大阪市の大正橋のたもとで昼食の弁当を開く場所を探していた。

当時、私は大阪府立城東工業学校機械科の五年生で、十八歳、昭和十七年(一九四二)より、陸軍の大阪造兵廠技術課工場に学徒動員で動員され、機械の修理や珍しい機械(含兵器)の解体などの仕事をしていた。

三月十日未明に、アメリカ軍の四発の超長距離重爆撃機B29三百機により東京が爆撃され、死者八万人以上、重軽傷者十一万人以上、全焼は約二十六万戸、罹

災者百万人、都心の約四十二平方キロメートルを焼きつくす被害を受けた(終戦後に知ったこと)。三月十二日に名古屋が空襲され、三月十四日に大阪がB29の焼夷弾の猛撃で十三万戸が消失した。

私と東君は、この一月から、町工場へ文書を持参したり、持ち帰る仕事を命じられ、毎日大阪の町工場回りをしていた。仕事の中味は『軍の機密』ということでは知らされず、二人はただ忠実に文書の配布と、返書の受け届けをしていた。空襲が夜間であつたために直接の被害を受けることがなかった。

国鉄田辺駅から四條畷までは汽車、ここで電車に乗り換え片町へ向かう。野崎を過ぎ住道辺りに来ると焼け跡独特のにおいがする。京橋で乗り換え、城東線の森の宮で下車、動員先の修理工場に入る。

昨日までは、国鉄や市電または自転車で回った工場だが、焼け野原になった大阪の工場回りは、今日から徒歩以外に方法はなかった。上本町筋から谷町筋へ西下する。まだ煙が立っている。その中に焼け残ってい

るのは電柱・土蔵・墓石が重なもので、木造建築は灰と炭になり、この世の地獄絵さながらの眺めであった。栗田鉄工株式会社に寄り大正橋のもとに來たら登になった。どこを見ても黒い炭と灰の世界、大きな石があったので二人は弁当の紙を敷き、昼食をとった。食後その石の上に乗ったら、石が『ふあ／＼、ふあ／＼』とへこむ、『どん／＼』と飛び上がった大きくへこむ、よく見たらそれは焼死した馬の胴体であった。

食後、二人は南海電車の起点である難波に向かった。難波の南西に専売公社のタバコ製造工場（戦後ここは南海フォークスの本拠地大阪球場になった）があり、れんがの壁だけが古い城壁のように焼け残っていた。複々複線の長い難波駅南の地下道を西から東へ通り抜けようと、東君と歩いて行くと、真っ黒に焼けたマネキン人形が山のように積み重ねられていた。高島屋百貨店が空襲で焼け、その店のマネキン人形が焼けてここに運ばれたものと考えた。実に黒く全体がはち切れるように膨れ上がっていた。そつとさわると柔らか

い、そして腹部が破裂しそこから腸がはみ出している。それはマネキン人形ではなく、空襲で焼死した人々が集められた山であった。とたんに足が動かなくなった、気はすっかりしているのに足が動かない。「おーい東、助けてくれ、足が動かひん」東君に肩を借りここを通り抜けた。

造兵廠に帰り、今日の返書を渡した。当時、廠長は相馬中将で、修理工場の担当は巽大尉、その技術課に鶴澤技官が仕事をしていた。鶴澤さんは私達に、

「学生、（実際は生徒）そんなに仕事せんでもよい、十八史略を教えたるさかい、こつちへおいで」

といって、十八史略の話をよく聞かせてくれた。話が面白いのでついこの話に聞きほれたが、日本がアメリカやイギリスに負けるとは考えていなかった。

（薪 在住）

昭和天皇を想う

鶏 内 ヨシ子（七）

昭和二十年八月六日、広島で原子爆弾破烈。八月九日長崎へ又投下。何方という人が一時に死亡。もう日本は駄目だ、全滅かと打撃をうけた。

八月十五日、忍び難きを忍びと陛下の御英断で終戦となりました。口には出しませんが、これで夫は帰れると安堵の胸をさすりました。嬉しくて嬉しくて夜もねむれません。となりの中尉の奥さんは、終戦になったことをさかんに憤慨されていたが、元気で帰っていた中尉さんは一か月後、高熱にあえぎ、血をはいで一週間苦しんで亡くなりました。原子爆弾

にあわれていたのです。お気の毒でございました。待ちに待った主人は、十九年十一月十日グアム島において戦死云々の公報が二十一年秋にありました。

昭和天皇の御製

「身はいかになるともいくさどめけり

ただたふれゆく民をおもひて」

大御心で終戦の御聖断によつて本土決戦という災厄をまぬがれ、平和が回復致しました。

あの恐ろしい戦争が終った。本当に有難く助ったと、感激し天皇陛下の元にいるということがどんなに有難く思えたことでしょう。涙、涙です。戦死者遺家族になりましたけれども終戦！！

日本人の食糧がもう三日分しかないという、二十年九月二十七日天皇陛下は占領軍総司令官マッカーサー元帥を訪問なさいました。時間を公式にマ元帥に通告されていました。第一次世界大戦の終った時、ドイツのカイゼルが自分自身の安全と皇帝の財産を衛つてもらおうと頼みに來たということを思い出し、敗戦国

の日本の王様もドイツのカイゼルと同じことと思い、服装を正して訪問なさった天皇に対してワイシャツ一枚で……馬鹿にして……天皇様が右手を伸べて儀礼の握手をなさろうとなさっても元帥はこれに答えなかった。

天皇陛下は重々しい語調でこう言われた。「あの戦争は私は重大な責任を感じている。皆私の責任だ、戦争責任を問われるなら私を処刑して頂きたい」元帥は自分の耳を疑った。

「宣戦布告の詔勅」が起草されたときには、天皇はそれをお読みになって「朕は戦争に反対である。けれども共事情止むを得ざるためにこの詔勅に御璽を押すから一句書き加えてくれ」と仰せられてあの宣戦の詔勅には「洵ニ己ムヲ得ザルモノアリ豈朕力志ナラムヤ」とはつきり天皇の御意志でないことが明記されてあるのがあります。天皇さまはあらかじめ持つて行っておられた、大きな風呂敷包みを机の上に置かれて

「ここに皇室所有の全財産の登記書類の全てでござ

います。私は命もいらないし財産もいらないです。国民が可愛そうです。今や国民は食糧に飢えているんですからここに皇室所有の全財産を指令部へお引渡ししますから何とか国民に食糧を補給してやって下さい」元帥は本当にびっくりした。元帥は天皇陛下の手を両手で握って「陛下」と感動の叫びで言ったわけであつた。

お帰りの時は元帥みずから天皇を玄関まで送って出られた。その後天皇陛下はマ元帥を数回訪問せられたが、その訪問を受け対話を交す度、マ元帥は天皇陛下の御人格に対する尊敬心が高まり最後の訪問を受けた時は大礼服を着て天皇の御訪問におこたえたのであつた。

天皇陛下はこの会談を他言せずと元帥に頼み約束なさつたのに、昭和三十年渡米した重光葵氏がマッカーサー元帥との会談の模様を聞き、読売新聞三十年九月十四日付にのせています。

天皇陛下の無私のご行動は、民族や国家のちがいを

こえて強く心を打ったのでした。

天皇陛下の御徳は日本人だけでなく全世界の人の心をうごかすのだ、ということを実感いたしました。天皇国日本とは、このような天皇陛下のみ心を国民一人一人が自分の心とすることであり、これが実現した時毎日毎日新聞を埋め尽くすニュース、テレビの伝えるニュースは起こらないのではないのでしょうか。

(大住ヶ丘在住)

軍国少年と二人の師

芦田 鐵雄 (六三)

四月から河内長野市にある短大に出講することになり、打合せのため二月の初め南海電鉄高野線の千代田駅におりたつた。四十七年ぶりのことである。金剛山の稜線だけが昔のまま。余りの変りように息をのむ思っていた。所用をすませ、足の不自由な私のため車で駅まで送ってくれる教務の職員に無理をいって、国立大阪南病院へ車を廻してもらった。なだらかな下り勾配の坂道の向こうに病院の門が見えた瞬間、病院の敷地にあった大阪陸軍幼年学校に入学するため、母（父は応召中）と二人でこの坂道を歩いた情景が、変りは

てた周囲の風景とはかわりなく、映画のカットバックのように鮮烈に蘇ってきた。一九四五年四月、四十七年前のことである。

私は府下福知山で一九三〇年に生まれた。福知山といえば歩兵二十連隊。田宮虎彦の小説『異母兄弟』に出てくる軍人の町である。軍歌を子守唄に育った私は、中学二年を終えると当然のこととして職業軍人の養成機関である陸軍幼年学校へ進んだ。出発にあたり私の最も尊敬していたM先生宅へ挨拶に伺うと、この先生海軍兵学校出身の海軍大尉、シベリア出兵の後退役し京大で歴史の勉強をやり直したとかいう変った人なのだが「今どき学問の出来るのは軍の学校しかない。仕方がないな」との一言が錢の言葉であった。

午前中は学科、午後は術科すなわち軍事訓練である。大阪はロシア語とフランス語の班があり、私はロシア語の方。このロシア語が週三時間のほか、数学、化学、生物、物理、国語、歴史とぎっしりつまっている。中学時代の同級生達が学業を捨てさせられ、軍需工場に

動員されて空きつ腹で働かされている時、私は一日五合の米の飯と週に一度甘味料と称して菓子まで支給される恵まれた状態で勉強に勤していたのである。一点の疑念も・う・し・ろ・め・た・さもなくである。皇統連綿たる現人神である天皇のため欣然として死地におもむくことこそ至誠の道と教えられ、軍の中核たらん将校生徒の自負に自己陶醉。外界とは一切遮断され、特室の一方通行の情報と、軍の教科書、教育法による徹底したエリート教育で純粹培養された十五歳の少年は、小・中学時代の素地もさることながら、僅か半年たらずのうちに見事に出来上ってしまったのである。

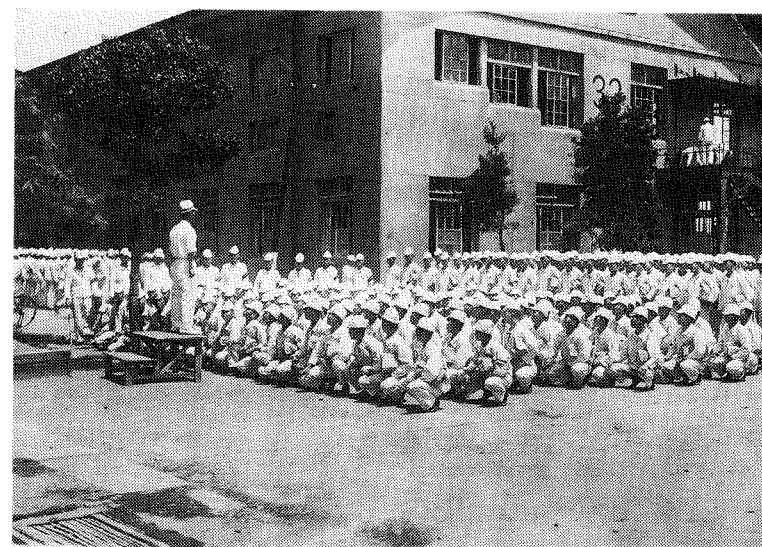
敗戦、中学校に復学。M先生は職業軍人であったため教職を追放され、「天皇制だけは謹持しなければ日本は亡ぶ」と絶叫の言葉を残して中学を去って行った。家に籠もったM先生は万葉集と国学の研究に没頭していた。その頃、五里霧中の私にとって画期的な人との出会いがあった。幼年学校で仲のよかった京都の友人を訪ねると、彼は或る家へ私を案内した。東山山麓の

静かなたたずまいの家だった。和服姿であらわれたのは、幼年学校へ敗戦直前教官不足のため配属されてきた学徒出陣の将校——将校でありながら、学生上りは軟弱だからと接触することを禁じられていた——その人だった。三方書棚にかこまれた部屋で彼は熱っぽく語った。丹波の田舎者の私には理解出来ぬ会話が友人との間で交わされる。大学へ戻り、一から学問のやり直しをしているという。何のための学問かを考えなければいけない。河上肇博士の著作を読み直しているのだ。君達、社会科学の勉強をしつかりやらなきゃ駄目だぞと繰返し語ったのを憶えている。三度目に訪ねた時、彼は行方不明、自殺したとの噂もあった。それから四年後、M先生は本居宣長の『玉勝間』を読みながら帰らぬ人となった。そして私は、この二人より齢を重ねてしまった。

これから週に一度千代田の駅に降りることになる。否でも応でも、六十二歳の私は十五歳の私と格闘しなければならなくなった。

(河原在住)

平和への願い



志願兵の朝の点呼風景

私の戦争体験から

奥 西 三 雄 (七二)

一、平和都市宣言をされたことに感謝し、立派に純なる心で推進されることを望みます。三十年前広島の被爆地より瓦その他の遺品を戴き、草内より生産の茶を贈って味わってもらい、以後交流を深めた。「本当」の「平和」を心より願う人々のわずかずつの拠出により、役場の玄関と草内小学校の前に平和の塔「碑」を建立し、中に遺品を収め今日後輩が心温く引継いで大切に戴いている。ありがたく嬉しき次第です。何時までもお願いします。

二、今の「平和」「ヘイワ」を専売特許か雨後の筍の

ように政党や集会で言葉や「字」にて人々をあぶるごと、騒ぐことが平和愛好者のようですが……本当の平和を愛好し、願う人々は各々の職務を完遂し、日常道徳常識を重んじ、人々と笑顔で接しておられる方々が平和実務者だと思う。「平和」の字をもてあそんだり「ヘイワ」の言葉をエサにされてはホトホト困ると思うのは私一人でなからうと思う。「平和」「国利益」「戦争反対」を叫べば、また看板にすれば知識人文化人だろうか。第二次大戦終結後、多数の国家が独立し「平和」が合言葉である筈が、百四十回もの民族闘争や国境紛争、同国民殺戮が発生し、その終息？ 国の組織美麗言の何々主義、何々政策の恐しさ、身をもって味うべきだと思う。

三、旧軍のこと、戦中のこと、酷評したり悪く書く、と人々にうわさされ、偉い人だ良い方だと褒めて戴く、それほど、旧軍は不徳の根源で、悪の温床だったのか。私は十四年に習志野騎兵学校に入った。北の端、南の淵の全国一道三府四十三県四百四名が「貴様」「俺」の

同期生で、多田区隊長（陸大四国師参謀）より「身を持するに厳なれ、ことをところするに公正たれ」と、朝に教えられ、夕に鍛へられた。隣の救仁郷（陸大自衛隊福岡師団長）川口正義（陸大京都師参謀）も厳しく又温情溢る人だった。田辺の里は朝日が東の山より昇り、黎明あつて朝となり、甘南備山の遙か西に沈んで夕暮れの楽しい時刻だ。習志野下志津原（成田空港含む）では太陽が遙か東の原の端から顔を出すのと同時に朝である。夕日が西の草原に沈むと同時に夜となり、夕暮の楽しい時間少く、闇となる西北に霊峰富士を拝し、北に筑波山を遠眺するが、自然変化少く子供の時、地理で習ったり本で読んだり、人から聞いたことが……。日本にも広いところがあるな—と思った。旧軍は「女」「子供」を守り、「年寄」を助け、「国」を護るを信条とし己の犠牲を顧みず、人様に盡すと心身を修練に明け暮れたものだ。

④ 過ぐる年ロスアンジェルスオリンピックにて当時の西中尉が障碍で優勝した「ウラヌス」号が余生楽し

み、毎日の馬運動だったが突然馬令二十歳で倒れた。西戦車連隊長が戦死される一か月前だった。アア人馬の念も通じるか。

⑤ しばらくの間、殿下侍従武官と一緒だったが、彼の方々の身の在り方、ことのところ理方、その言動には、ほとほと感じ入った。戦術講義等の時は椅子に座ると、一時間でも微動だにしない。現地戦術や実兵指揮等々にて、疲労困憊に達しても座して討論され、草原に裸になって寝転んだ私どもと、あんな生活では、一か月も命がもたんな—と今は極端な賛美や余分の崇拜は可としないだろうが、人間修養は立派で最もたるもの十七年献上の桃を仮住居に届けた折、「白衣服ヲ着シタ美麗ナ女官」が白い飲みものをくださった。連れの二人に奨めつつ、口に運んだところ、山羊の乳だった。乳類は特別嫌だった女官の前で吐き出せず咽喉に入らず、汗タラタラで苦しみ二人に助けられ恥かしい謹慎だ。以後牛乳を嗜み、老後の栄養補給源だ。

⑥ 二十年八月、大本営より某國の参戦を聞いて啞然

とした。條約協定等々は紙一枚か相手を甘く見たにもほどがある。その後数十万人を連行し、塗炭の苦しみと酷使にて数万の命を無くした事実、国際協定も人道も無いのか……。今日良い話や甘言があつても、霊と同志の心を肝に銘じて、将来に禍根を残さざる処置をして欲しい。東南アジア、南方に手を握る国々がないのかな—。郷土部隊参戦の「バタン半島」死の行軍と意味が違ふ。二万前後との情報、諜報が数万の捕虜実数現地に食糧、宿舍なく輸送機関ゼロの当時、万策盡きて部隊長決心を問われ「処置なし」であつたが、責任者や関係者は戦犯死刑、刑期何年、勝者勝手敗者無念御冥福祈る。

⑦ 我が家でも近隣親戚でも難しいことをいえば「お爺さん時代が違ふ」と時移り年表変わつても「道徳」「人道」「常識」変らずだ。

（草内在住）

世界の平和を願って

本 元 文 雄 (七)

終戦後四十数年経過しました。その後の日本、戦争に負けたとはいえ、順調に復興の一途をたどり、建国以来味わったことのない平和な暮らしを味わっており、ますます。ややもすれば戦争の恐ろしさを忘れ勝ちになり、我々国民は今や改めて戦争と平和を考えさせられる時でもあると思います。戦後四十数年にわたり、戦争の悲惨さや傷跡については多くのことが語られて来ましたが、しかしどんなに語り継がれて発掘されたとしても充分にはほど遠く、これまで知られなかった事実が今なお明らかにされています。そして同じ体験でも人それぞれ

れに違う意味の重みを持って語られて来ました。しかし我々戦前戦後を体験した者にとって、次世代に戦争の悲惨さを語りたい気持ち一杯ですが、戦争体験を持たない二十代三十代世代の人たちには平和の現代ではピンとこない話であり、戦争中の苦労話は沢山ありますが、身近な孫達には時折り話しかけたりして食糧の不足、マラリヤや疫病、そして敵の攻撃など、戦争の悲惨さは脳裏を離れませんので、日々の生活の有難さと共に食べ物の大切さを味わってきた者にとっては一粒の米も大切にしよう語っております。そして終戦を遙か印度洋ニコバル島で知り、武装解除されて毎日暑い酷暑の中、赤鬼のような外国人に、ハンマーを振り廻されての重労働と食糧不足による食べられる野生植物の採取など、生と死の境を体験をした者にとっては、戦争は二度と味わいたくない思いで一杯です。

今現在、世界のどこかでは何かの争いが起きていますが、我々日本人は世界は一つの信念の下で世界の人々と仲良く平和を願う次世代には二度と戦争を起さない

ことを語り継いで行くのが我々戦中戦後を生きて来た者の責務と考えて世界中が永久に平和が続きますよう祈りたい心で一杯です。

(宮津在住)

記憶の中に平和を求めて

齋藤 絹代 (五)

今や企業戦争、軍備戦争、地域紛争など、私達の周囲では絶え間無く争いが続出。本来人間は、平和を切望しながら、いつの時代も泥仕合に縁が切れません。住み良い地球をと大きくスローガンを掲げながらも、環境汚染や自然の破壊に関与し、全く矛盾している現状にあります。パスカルは「人間は考える葦である」といいましたが、一人一人が問われ、自覚、自重する時を迎えているのでありませんか。

日本は今から四十六年前、あのいまわしい戦争にピリオドを打ちました。当時私は四歳でしたが、終戦後

がなければ話せなかったのでしょうか。それにひきかえ母は幼児を抱えての苦しかった内地の出来ごと、田舎のないものの惨めさ、耳にタコが出来るほど聞かされました。当時母は病弱で、乳児の弟と幼い私を連れ夫を戦地に送り、不安な日々の連続で幾度も生死の危機に遭遇し生きているのが、不思議なくらいです。弟はいつも母の背に負われ、私の手をしっかりと握り、大空襲の火災の中を逃げ切り、時には機銃掃射を受けながら、ある時は敵機兵の顔が見えるような近距離からも全力で逃げたことを小さい私も憶えています。本当に怖かった。家の回りには大きな爆弾の池がたくさんありました。子供達はそこに石を投げて無心に遊んだものです。

そして私も五十路に入り戦争を語る人も少なくなり、私の記憶も徐々に薄れつつあります。しかしどうしても忘れてはいけないうこと、人と人との殺し合い、それは罪です。大罪です。どうか一人一人が識別の目を持ち、二度と誤まちをふみませんように。気の毒な多く

も長い間、工場より鳴り響くサイレンの音に体をびくびくさせ怯えた日のことを忘れることが出来ません。あれからの八月十五日には毎年、終戦記念日の様々な行事が催されています。厚生省より政府広報として「全国戦没者追悼式」が挙行されると広く国民に知らされています。それに対して幾人の人が平和祈念のため、新たな誓いをしているのでしょうか。日本の復興は内外の多くの犠牲の上に築かれていることを忘れず、次の世代の人達に語り継ぐ責任を負って生きている。私自身戦時中母はいつもこう言っていました。「この子は機敏な賢い子だ。」それから戦後、世の中が落ちつくにつれ「この子はどういね、馬鹿ね。」とこれは私のことです。そして母の口癖でした。今考えると馬鹿に違いありませんが、たとえ幼児であっても生死をかけた厳しい時代、機敏でなければ生きられなかった環境が私の中にあったのでしょうか。

父は二十年前、五十七歳で亡くなりましたが、生前お酒を飲むと戦地の中国のことを話していました。酒

の犠牲者、中国孤児、従軍慰安婦、強制的に連れてこられた韓国の人達を忘れないで下さい。また今日では飢餓にあえいでいる世界の人のことも、飽食の時代に生きている日本人、手を差し伸べようではありませんか。

(大住在住)

永久に平和が続くことを願って

保田定男(六六)

昭和十二年に支那事変が始まり、翌十三年の二月四日、父に召集令状が来た。私が三山木尋常高等小学校六年生、弟が二年生の時であった。令状が来てからわずか四日間の慌しい出発であった。皆さんに送ってもらって元気に家を出ていった。残されたのは祖母と母の四人である。家は農業なので何とか耕作を続けて行かねばならない。祖母、母も一生懸命働いた。私も学校から帰えると茶園の草引、水田の除草と色々手伝った。牛も飼っていたので草も刈らねばならない。父のことも心配だし、淋しい。父一人が家にいないとこ

んなにも辛いものかと思った。幸い近所の人、消防団の人、小学校の同級生まで除草の手伝い等に来て下さった。子供ながらに人々の親切が身にしみて嬉しかった。

支那事変の始め頃なので、戦勝のちようちん行列等もあったが私は楽しくも、嬉しくもなかった。戦死の公報が入ったと聞かされるたびに、子供ながらに大人達はなぜこのような戦争をするのだろうかと思った。

幸い父は二年ほどで無事に帰って来た。しかし入替りに次々と多くの人が出征されるようになり、この方々が無事に帰ることが出来るのだろうかと心配であった。そのうちに大東亜戦争に突入、私の友達も早い人は自分から志願をして入隊された。この戦争が正しく、国のために戦うことが愛国心の強い国民だという教育をされて、私もその頃には、国のため皆んなのため、軍人にならなければならぬ。国のため、皆んなのためなら死ぬことが出来ると考えるようになった。

昭和十九年に徴兵検査を受けた。いつ入隊の通知が

来るかわからない、父も予備役なのでいつ召集令状が来るかわからない。父が軍隊にいる頃、お父さんの面会に息子さんが来られた。息子さんは将校さんで、お父さんが召集の兵隊さんだった。そのような方を知っているの、私の家も親子で入隊というようなことになるかも知れないので、覚悟をしておいた方が良いといわれた。私は現役入隊したが、父は家に残れた。その間、色々と苦勞をしたが昭和二十年八月十五日、終戦をむかえた。

私達は何のために生命を賭けて戦争をしたのかと考えさせられた。埋れ木に花が咲き、実を結ぶまで、我々青年が戦死をされた方々の分まで頑張らねばと心に決めた。それから青年団活動、農業研究会等、皆さんと力を合せて頑張った。その後の青年期は失った分も取り返すべく必死で苦しい中にも充実した日々であった。戦争中は勿論だが終戦後も物の無い、特に食糧のない苦しい時代が続いた。

もう二度とこのような心配、苦しみは味わいたくな

い。また子供達、いや子孫にも永久に味わせたくないと思う。このような苦しみは私達の時代でたくさんだ。永久に平和な時代が続くことを心から願う毎日である。

(三山木在住)

戦争を省り見て

藪内唯博（五）

「勝つて来るぞと勇ましく誓って国を出たからは……。」

と歌の文句通り、父親の赤紙通知がポストに入り、村長・区長さんを初め親戚多数の皆様の励ましで、万才、万才と送り出して頂き、その後帰らぬ人となりましたのは、私が八歳の時でした。残された私の家族は、路頭に迷った母親と私を含む四人の兄弟でした。

その後、束の間に二人の弟妹が亡くなり、母親も病弱となったので、幼少の私は親の看病と家事勉強にと努力致しました。また唯一の財としておりました、山の木材が舟の材料として強制没収となり一家破滅とな

りましたが、親戚と人々の力添えのお陰で、何とか苦境の中から終戦を迎えられました。御陰様をもちましてその後、遺族恩給、その他福祉行政の力添えを賜わり、現在の私があるのです。思い返せば艱難を振り返り、二度と残酷な戦争は繰り返すこと無く、昨年は真珠湾五十周年の年で、双方の国家も紳士の挨拶、また新春早々ブッシュ大統領を貴賓として迎えることができ、中身の話は別として、その言葉に戦った同士が、今一番の親友であると挨拶を聞いた時、私は敗戦より復活した我が日本、そしてその御恩を忘れることなく、この御言葉に酬いることを、国民各自が反省と自覚をもち、もう一度初心に返り認識し、全世界のリーダーとして両国の力で平和と民主主義の社会を心より願います。

（打田在住）

レイテ島慰霊行

小西惣次（七四）

「昭和十九年十月二十三日、レイテ島パロの戦闘において全身砲弾瘡にて戦死」これは弟の戦死公報だった。十九年一月に比島へ現地入隊して十か月余、二十二歳だった。

二十万余の米軍がレイテ島のドラグからタクロパンの約四十キロの東海岸に上陸、パロはその中間にあつてマッカーサーの上陸地点で、激戦を偲び「赤の海辺」と呼ばれていた。

いつか現地に赴き、霊を弔いたいと思っていた折、昭和五十年八月二十一日から二十八日に、京都府遺族

会青年部主催の「第二次比島慰霊団」が結成され参加させていただくことになった（レイテ島班十八名）。

マニラからレイテ島のタクロパンへ、福知山の長安寺正木上人導師が同行され、尋ねる戦跡地で塔婆を捧げ追悼読経を下され、遺族は全く感無量だった。現地住民も私たちの周りに集り、子供らには菓子などを与えると大変よろこんでいた。砲火に焼かれた海岸のヤシの木も、三十年余経った今、大きく育ち実っている。

海岸線のドラグ、パロ、タクロパンの慰霊後、海岸線から奥へ、ブラウン飛行場、ダガミ、リモン峠、カシキボット……へと慰霊。

ブラウン飛行場は高千穂空挺部隊が飛行場奪還のため降下したところで、同行の生き残られた方の話は涙なくして聞くことはできなかった。

ダガミでは、故衆議院議員玉置一徳さんが建立された合同慰霊碑の前で、合同追悼法要が厳粛に行われた。リモン峠は「死の谷」といわれ、攻防の最も激しか

ったところで、この峠だけで、二万人余の日本の将兵が戦死されたそうである。山道の斜面に赤さびた一五センチ野戦重砲が激戦を語るように残っている。

リモン峠を越えると西海岸のオルモックへオルモックから「セブ島」にわたる、ここは天山中麓で特攻機の基地だった。小高い丘は遙かレイテ湾が遠望でき、特攻隊の将兵の雄々しくも悲しい姿が偲ばれ、ご冥福を祈っていた。

気温は四十度近くもあつたが湿度の関係か木陰ではサッーと涼しい感じがする。

昭和十三年四月、私は短期現役兵として呉海兵団に入団、五月中旬、巡洋艦「鈴谷^{すずや}」（長さ百九十八メートル幅二〇メートル一万二千トン艦長以下約九〇〇名）に乗艦、連合艦隊二艦隊七戦隊に属しハードな訓練を受け、志布志湾では飛行機搭乗実習で宙返り飛行に同乗し、飛行兵のきびしさを知り、潜水艦では潜行後浮上して「空気」のうまさを実感した。七月末、急遽呉に集結、弾薬、食料、燃料が補給され、高角砲高射機

銃は戦闘配置について行動したこと（ソ満国湾の張鼓峰事件でソ連からの空襲に備え）を思い出しながらその重巡鈴谷がミッドウェイ海戦にも残り、最後のレイテ作戦で十九年十月二十五日、今立っている目の前の海で沈んだのだ、と思いをめぐらしながら、亡くなられた幾多の英霊に只々頭がさがる思いでじつと海を眺めていた。

“砲煙に崩れしレイテの山なみも

今緑濃くしずかに語る”

“いたまじき戦跡をかく尋ねれば故郷を^{ふるさと}

征でたつ姿 浮びきて悲し”

国難^{なん}に殉じ、散華された英霊を偲びながら、再び悲惨な戦争がくり返されないようひたすら平和を祈っている。

（田辺在住）

短歌

「北支戦線いろは短歌」

西村 豊三郎（七三）

い 何時も来し水汲クーリの老人に回転焼を^{あが}購ないて喰ふ（初年兵時代腹がすく）

ろ 路上行く先兵斥候狙撃され応射の機銃しきりに聞こゆ（先兵斥候）

は 腹這の匍匐^{はふく}前進くりかへし敵の陣地に手榴弾を投ぐ（敵陣地攻撃）

に 日章旗地上で振れば友軍機弾薬食糧落して帰る（友軍機の捕給）

ほ 砲兵の砲門一斉火を吹きて敵のトーチカ一瞬に^ち碎ぶ（砲兵の攻撃）

へ 兵として召され家門の名誉とぞ氏神詣で故郷を出づ（出征）

と 遠き土地黄河を越して我が頭上敵の砲弾前後に落ちる（敵黄河対岸より攻撃）

ち 父母と幼な妻子の便り読み頼に傳ふる涙をぬぐふ (内地からの便り)

り リリリリと電話機取れば襲撃と分遣隊から救援頼み (分遣隊から救援頼み)

ぬ ぬる／＼と背中にしみる戦友の血か夜襲で逝きし戦友を背にして (戦友の死体収容)

る 累々と足のふみ場の無き死体／＼破棄して敵は敗走 (敵の死体)

お 仰ぐれば朝日の如き日章旗今し陥せし城門に立つ (城門の日章旗)

わ 我が陣に敵も天晴喊声をあげて襲撃我を襲も (敵の襲撃)

か 喊声をあげて敵陣突込めば死体のこして敵兵影見ず (敵兵敗退)

よ よろ／＼とよるめきながら投降する聞けば十日も食糧喰わず (敵食糧なく投降)

た 戦かひのしばしの間隙みつめつゝ虎の子輕機関銃の分解掃除 (兵器の手入)

れ 傳令に出でし戦友武田君狙撃せられて右眼失なふ (戦友の負傷)

そ 狙撃兵眼鏡つけし小銃で重火機小火器血祭に挙ぐ (友軍狙撃兵)

つ 常日頃初年兵苛めの古兵等は弾飛くればびく／＼とせり (初年兵苛めの古兵)

ね 根深葱炊けば時たま牛や豚汁が変じてすき焼もでき (野戦料理)

な 泣き女二日綴きに泣き通す哀れに思ひ御佛前送る (葬式に参列)

ら 喇叭年国の鎮めの曲を吹き戦友の遺体今茶毘に伏す (戦友の遺体火葬)

む 無理をせずじっくりかまへて作戦を良き指揮官は兵を殺さづ (将校指揮)

う 海み行かば水漬く屍と山行かば草むす屍兵は進むも (皇軍進軍)

ゐ 命より大事な小銃傷つけば歩兵銃殿とおお託するなり (三八式小銃に託)

の野も過ぎ山をも過ぎて索敵行^{あじ}出し進む幾千里 (連日行軍)

を思ふ事はつきり書かず軍事便団の親子に近況知らず (軍事便)

く呉^ふくも身体大事に忠勤を神に祈願のお百度詣で (氏神お百度詣)

や優しさと慈愛で接す民衆も家族の如く慕ひ寄るなり (中国民衆と話合)

ま松林丘の上なる迫^は撃砲陣地歩兵砲前へと隊長の呼ぶ (歩兵砲前へ)

け今日原隊から連絡ありて故郷からの慰問袋の小包受くる (故郷からの慰問袋)

ふふり向ひて弾薬渡せとその右手折れて血の吹く名誉の負傷 (骨圻貫過銃創)

こ広告や連単ビラで我が兵の戦意耗失をはかる敵軍 (敵の広告連単ビラ)

え遠々と連^み峯の綴^なきの太行山脈我が庭先と兵は勇むも (北支太行山脈)

て擲^て弾筒前へと隊長命ありて敵の頭上へ一発見舞 (擲弾筒攻撃)

あアメリカやイギリス相手に東亜戦隊長訓示で開戦を知る (大東亜戦争開戦)

さ笹餅や万頭喰つてと部落民中秋節に招かれて行く (中秋節に招かる)

き昨日迄元気に戦う戦友も今日は我が胸遺骨と成りて (戦友の遺骨)

ゆ夢に見し妻や子供の名を呼びて我手つかんで戦友は逝^ゆきにし (戦友の戦死)

め命令とあれば五尺のこの身体大君に捧げるこの時ぞなき (突撃分隊に参加)

み見事なる作戦敵の裏をかき一網打尽袋の鼠^{ねずみ} (敵を包囲)

し新年の祝宴最中非常呼集糧秣輸送敵に襲わる (新年に輸送隊襲わる)

ゑ遠々と流れ遙かな黄河にて身体衣服洗濯をする (黄河にて戦陣の垢をおとす)

ひ 非常呼集かかつて部所に取りつけば敵さん陣地にせまりつつ見ゆ (敵の陣地攻撃)

も 桃や鶏玉^{たまご}大人進上と部落民分遣隊に慰問に訪ふる (中国部落民の慰問)

せ 戦斗の殊勲者氏名君の名が隊長便り病院にて受く (隊長便り病院にて受く)

す 隙あれば歩哨線々突破して敵の動向埒る斥候 (友軍斥候)

ん 運あれば何時まみへんこの支那で身体大事に再会^{さいかい}やくす (戦友と再会役す)

(大住在住)

「短歌五首」

下川 重和 (七二)

戦争すて正義つらぬく手段なく迷へる人の心の中は

戦争は人殺しとよ人間の悟る日来るはいつのことかな

戦争は人殺しとの考えを持たざる国の多き世の中

人殺し公然とさせる戦争のなくなる時はいつにてあらむ

戦争を正義と考える人々の心おさなしあはれなるかな

(大住在住)

資

料

用語解説

撃ちて止まむ運動 (うちてやまむうんどう)

昭和十八年三月十日の第三十八回陸軍記念日を期したスローガン。「撃ちて止まむ」を決戦の合言葉に、「鬼畜米英撃滅の日」まで一億国民が一丸となって総進軍しようと呼びかけたのである。陸軍省は「撃ちて止まむ」一色の行事を催し、その一つとして大講演会を全国各地で開いた。

営倉 (えいそう)

軍紀風紀を乱した兵隊を入れる、軍隊内のブタ箱。衛舎上等兵が監視について、起床時限から消灯時限までは横臥も許されない。各房の入口には営倉入りの者の隊号・等級・氏名・罰目・留置などを記した札が掲げられている。軽い者は、中隊長の許可によって、用紙と一冊の書籍を与えられることもあるが、重い者は

重営倉に入れられ、飯と塩と水だけの食事で、毛布も与えられない。

お米通帳 (おこめつうちょう)

お米の配給を受けるための通帳。米の割当配給は、昭和十六年四月一日から、東京・大阪・神戸・京都・名古屋・横浜の六大都市で実施された。割当量は世帯員の年齢や職業に応じて、一日何グラムというふうに割り当てられ、例えば十一歳から六十歳までの者は一日三百三十グラム(二合三勺強)であった。世間では「お米の通帳制」といったりした。

学徒出陣 (がくとしゅつじん)

明治憲法のもとでは男子はすべて満二十歳になると徴兵検査を受け、合格者は一定期間の軍務に服することが義務付けられていた。しかし文部省が認める大学・高等専門学校生徒に限り、満二六歳まで延期することができるとされていた。昭和十六年、戦局の緊迫

は兵員の増大を要求したため、東条内閣は「徴兵猶予」を取り消した。この結果、全国の法文経の学生十三万人が出陣していった。

関東軍 (かんとうぐん)

中国山海関以東一帯、つまり奉天、吉林、黒竜江省の三省を関東と呼んでいた。明治三十一年以来、この関東州をロシアが租借していたが、日露戦争後日本が租借権を譲り受け、そこに関東総督府をおいて、その指揮下に約一万の兵力を駐留させた。その後大正八年に関東軍司令部が新設され、統帥権の独立を保証された。関特演では七十万人が集結した。

関特演 (かんとくえん)

関東軍特別大演習の略である。昭和十六年六月二二日に開始された独ソ戦の推移をみて、対ソ戦を断行するための準備として、昭和十六年七月二日、大本営陸軍部は関東軍特別大演習の名で、大動員を行うことを

認めた。満州に七十万の兵力と六百機の飛行機、その他膨大な武器・資材を集結した。また、ソ連軍を満州国境に縛りつけて、ソ連の対独戦争遂行の妨害をも意図していたのである。

強制連行 (きようせいれんこう)

戦争中、働ける日本人はすべて軍需生産にたずさわったが、それでも不足する労働力を埋めるために、朝鮮人が強制的に徴用され日本に連行され、日本人以上に苛酷な肉体労働に従事させられた。昭和十四年に始まり、敗戦までに七二万四千人余りが連行された。

玉砕 (ぎよくさい)

名誉や忠義を重んじて、玉が美しく砕け散るように、いさぎよく死ぬことを意味するが、太平洋戦争中の戦況の悪化にともなう、後方からの補給を絶たれた小島で、日本軍が全員が戦死したとき使われた。昭和十八年五月二九日のアッツ島に始まり、タラワ、サイパ

ン、硫黄島など玉砕があいついだ。

空襲 (くうしゅう)

第一次世界大戦に軍用機が登場して以来、航空機は急速に発達した。第二次大戦においては、戦いは戦場だけでなく、敵国の生産施設や交通遮断の目的で都市部などに爆撃が行われた。日本の場合、サイパン陥落後終戦までに、延べ一万七千機が来襲し主要都市十三か所が空襲を受けた。

月月火水木金金 (げつげつかすいもくきんきん)

土曜、日曜の休みのないこと。海軍は日露戦争のとき、バルチック艦隊の極東来航に備えて猛訓練を実施した。その後、ワシントン会議の軍縮条約締結やロンドンの海軍軍縮条約調印により、主力艦保有量の劣勢を技術力でカバーしようと訓練にさらに拍車がかかった。こういう状況のもとで月月火水木金金という言葉が生まれた。また、昭和十五年十一月に同名のレコー

ドが発売され、大ヒットした。

衛兵所 (えいへいしよ)

衛兵は、連隊を守備する重い責任がある。十二日に一回くらの割で、下士官を司令とする一個分隊十数名が任務につき、表門・裏門・火薬庫にいたるまで警戒にあたる。衛兵所には司令以下非番の数名が腰をかけて眼をひからせ、出入りする者を監視する。外出入の兵隊は、衛兵所の前を通る時、服装を改め、歩調を正し、厳正な敬礼をする。特に初年兵などはびくびくしながらこの前を通った。

銃後 (じゅうご)

直接戦争に加わらない一般国民も、戦場の直ぐ後方にいるということで、大政翼賛会の指導の下で町内会や隣組、国防婦人会、翼賛壮年会などが組織された。

酒保 (しゅほ)

軍隊の営内にある物品販売所である。あんぱん・しろこ・うどん・煙草・酒類が売られている。兵営生活には、欠かせない憩いの場所である。入営当初は余り顔も出せないが、古参兵になると入りびたりの者も出てくる。特に酒好きの兵隊には必要などころで、古いラッパ付きの蓄音機が地方の歌を流していたりする。

手榴弾 (しゅりゅうだん)

日露戦争のとき旅順要塞攻防戦で、苦戦を強いられた日本軍がせっぱ詰まって空き缶などに黒色火薬をつめ、導火線に点火して敵に投げつけたのが始まりといわれる。その後大正十年に第一次世界大戦のとき、ドイツがこれを兵器として完成させた。

焼夷弾 (しょういだん)

燃焼性の物質と炸薬を入れたもので、絨毯爆弾に使

用された。エレクトロン焼夷弾、黄燐焼夷弾、油脂焼夷弾の三種類があり、重さは二キロ、五キロ、十キロなどがあるが、大きいものになると百キロというものもある。

召集令状 (しょうしゅうれいじょう)

在郷軍人を召集する命令書。使われたはがきが赤色であったので赤紙とも呼ばれた。実際には陸軍の充員召集、臨時召集、国民兵召集は淡紅色、海軍の充員召集には紅色が使われた。これに対して、国民徴用令による軍需工場などへの召集令状は白色が使われたので白紙と呼ばれた。

新型爆弾 (しんがたばくだん)

昭和二十年八月六日に広島に投下された原子爆弾を大本営はこう発表した。市民数十万人が死亡し街は荒野と化した。大本営は相当の被害としか発表しなかった。また長崎の場合も同様であった。

絶対国防圏 (ぜったいこくぼうけん)

昭和十八年日本軍はソロモンやニューギニアなどの主要拠点を撤退しなければならなかった。このような状況で開かれた九月三十日の午前会議で決定された、今後絶対確保すべき要域をいう。具体的には、千島、小笠原、内南洋(中、西部)及び西部ニューギニア、スンダ、ビルマを含む圏域。

零戦 (ぜろせん)

陸の隼、海の零戦といわれる海軍の零式艦上戦闘機の略称。昭和十二年に計画要求書が提出され、昭和十五年に正式採用となった。皇紀二六〇〇年の下二桁をとって零式艦上戦闘機とよばれた。大戦当初は無敵を誇った。

千人針 (せんになはり)

武運長久と安泰を祈って、白布に赤糸で、千人の女

大本営 (だいほんえい)

戦時の時に設けられる軍事に関する最高の統帥機関。大本営が設置されたのは、日清・日露の両戦争と昭和十二年以降敗戦までの三回だけであるが、陸軍参謀本部と海軍軍令部との意見を天皇の裁断によって調整する機能をもっていた。昭和十二年に設置されたときには、大本営政府連絡会議が設けられ、統帥と政務とを統一した最高軍事指導の場となった。大本営政府連絡会議・最高戦争指導会議は重要な国策を決定する場合には御前会議という形式をとった。

代用品 (だいようひん)

戦争の長期化に伴い物資が不足し、日用品はことごとく代用品にかえられた。特に鉄類は供出され、鉄製の鍋や釜などは土鍋や土釜にかわった。また、竹制スプーン、鮫皮靴、木製バケツなども登場し、水筒、アイロン、郵便ポスト、手榴弾などは焼物にかえられた。

性が一針ずつ、千個の縫玉を縫って、出征兵士に贈ったものである。日清・日露戦争のころ、「虎は千里を走って千里をもどる」といういわれから始まったとされている。虎のような猛き力を願って、寅年生まれの女性、特に「五黄の寅」は運氣が強いとされており、この年の人には年の数ほど縫って貰うということもなされた。全ての兵士はこれを贈られて腹に巻いて出征していった。

疎開 (そかい)

航空機の発達した近代戦争では、銃後でも空襲を受ける公算が大きい。このため都市など、空襲の被害を少なくするため、人口や建物を分散すること。施設の疎開は工場が優先され、建物の疎開は密集地の建物が取り壊されて空き地を設けた。また、空襲の増加とともに学童の集団疎開が行われた。

竹槍部隊 (たけやりぶたい)

戦争末期、鉄の不足から、日本各地にあり安価な竹を削った槍が代用品に使われた。銃後の女性も国民義勇隊を結成し、モンペにはち巻姿でこの槍をもち、「一億火の玉」精神で訓練に励み、アメリカ軍の本土上陸に備えた。

敵性語 (てきせいご)

戦争の長期化より「軽薄な舶来思想の遺物として頑迷にこびりついている外来語を一掃し日本語に返れ」と敵性外来語廃止の気運が高まり、煙草の銘柄や野球の用語などが次々日本語にかえられた。

転進 (てんしん)

昭和十七年後半頃から、アメリカ軍の反攻により日本軍は各地で撤退を余儀なくされた。それを政府は撤退とは発表せずに、「当初の目的が達成されたので別の

料 資
場所へ転進した」という発表をした。特に昭和十八年のガダルカナル島やキスカ島の転進が有名である。

燈火管制（とうかかんせい）

夜間空襲の際、敵の爆撃機に目標物を与えないよう電灯を消すこと。一般家庭でも、電灯に暗幕を被せたり、窓にカーテンを張ったりして光が外へもれないようにした。

特攻隊（とっこうたい）

特別攻撃隊の略称で、戦闘機「零戦」に二五〇キロの爆弾を積んで、敵空母に体当たりする攻撃部隊。第一航空隊司令長官大西瀧治郎中將によって、編成された神風特攻隊は、アメリカ軍から「カミカゼ」と恐れられる名となった。特攻隊員は志願した者に限定されたが、強制的な自殺攻撃といえる戦術であった。

隣組（となりぐみ）

その地域の消防、燈火管制、警報伝達、防護の任にあたることを目的として、昭和十四年八月につくられた十戸内外を単位とする国民総動員体制の末端組織である。また、生活必需品は隣組を単位として配給された。

配給制度（はいきゅうせいど）

戦争の長期化による物資の不足で、物を割当てに応じて配る制度。石炭・石油・鉄鋼・電力が配給統制となつたのははじめ、昭和十五年には衣料品をはじめ、米穀・調味料・マッチ・石けん・たばこなど身の回り品までが切符制から配給制へと切り換えられた。米の配給は、次第に押麦・高粱・とうもろこし・馬鈴薯・うどん・乾パンなどの総合配給となり、それによりに闇販売を生むことになり、必然的に「買い出し」生活へと国民を走らせた。

罰直（ばっちよく）

軍隊内での多くの私的制裁のこと。その種類もバツターと呼ばれるものや、ビンタ、ウグイスのつな渡り、ミイミイゼミ、ささげ銃、重装備をつけたの駆け足などいろいろあり、上官の気分次第で余興のように罰直が行われた。そのため部下は罰直をまぬがれるために上官のものを奪い合つて洗濯し、みがきあげた。日常のそういう振る舞いが、罰直をまぬがれるか否かにもかかっていたのである。そこから「軍隊は要領である」という言葉を生みだした。事実それが一面の真実をも表していた。

B 29（ビーにじゅうく）

アメリカ第五八爆撃航空隊の主力爆撃機、全長三〇・一メートル、全幅四三・〇五メートル、自重三二・三七トンもある巨大な爆撃機で、ボーイングB 29スーパー・フォレス（超空の要塞）と呼ばれた四発機。最大九・〇七トンの爆弾が搭載でき、最高速度五八一キロ/時

不敬罪（ふけいざい）

旧刑法に定められていた罪で、天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子、皇太孫、神宮、皇陵にたいして敬意を失う、つまり不敬行為をすることによって問われる罪。

兵役検査（へいえきけんさ）

満二十歳になった者を現役に適する者、国民兵役に適するが現役に適さない者、兵役に適さない者に区別する身体検査。甲乙丙丁の種類があり、現役に適する者は甲種合格といって兵役についた。

奉公袋（ほうこうぶくろ）

表に「奉公袋」と墨書きした布の袋で、中に軍隊手牒をはじめ、勲章や記章などを入れておく。他には適任証書とか招集及び点呼令状、その他貯金通帳なども入れていた。兵隊にとって最も大切なものを入れておくところが奉公袋であったといえる。

昭和十五年に暴利行為取締規則を改正し、公定価格には公の表示を義務づけた。関係主務大臣が閣令をもってさだめた価格、これが公定価格でマル公とよばれるようになった。

満鉄（まんてつ）

南満州鉄道株式会社の略称である。日露戦争の勝利によって関東州の租借権とともにロシアから物資的賠償として獲得した東清鉄道南部線及びその支線と付属地。これに政府が一億円を出資し明治三十九年に設立された半官半民の国策会社。また、鉄道路線周辺に一般行政権も認められていた。

マル公（まるこう）

日中戦争による物資の不足が深刻化し物価が高騰したため、国際水準まで物価を引き下げようと、政府は

年 表（昭和元年～二十一年）

年	月日	政治・世界	月日	社会・世相	月日	田辺町・京都府
昭和元年	12・25	大正天皇死去 昭和と改元			12・25	山城地方大雪
昭和2年	2・7	大正天皇大葬	5・28	第一回全日本オープンゴルフ選手権大会開催	3・7	丹後大地震（京都府死者三九五九人）
	3・14	東京渡辺銀行が破綻。金融恐慌の端緒となる	7・24	芥川龍之介服毒自殺	10・17	田辺町畜牛組合設立
	5・28	政府、居留民保護を理由に中国山東省に出兵（第一次山東出兵）	8・13	第十三回全国中等学校野球大会を初めて実況中継	12・20	「田辺町報」創刊
	6・20	日・英・米の三か国海軍軍縮会議、ジュネーブで開催。失敗に終わる	12・30	日本初の地下鉄開通（浅草―上野間約二・二km）		
昭和3年	2・20	初の普通選挙による総選挙	1・12	大相撲の実況中継開始	3・10	三山木小学校、御大典記念に校庭拡張
	3・15	政府、共産党関係者一斉検挙。徳田球一ら起訴（3・15事件）	3・24	御大礼記念博覧会でマネキンガールを使用する	4・24	山城地方水害

昭和10年			昭和9年						
3・16	2・18	12・3	11・20	10・1	9・18	8・2	3・1	10・14	
独、ベルサイユ条約軍備制限条項	貴族院本会議で、美濃部達吉の天皇機関説問題化	単独破棄通告を決定	政府、ワシントン海軍軍縮条約の（士官学校事件）	村中孝次・磯部浅一ら皇道派青年将校、クーデター計画容疑で検挙	設を主張	ソ連、国際連盟に加盟	陸軍省、陸軍パンフレットを発行。戦争準備のための国防国家建設を主張	関東軍、溥儀を満州国皇帝に就任させ、帝政を開始（元号は康德）	ヒトラー、大統領を兼任。独総統へ
5・1	3・8		12・26	11・2	9・21	4・21	1・1	8月	のクーデター計画発覚（神兵隊事件）
戦前最後のメーデー	忠犬ハチ公死ぬ		職業野球団大日本東京野球倶楽部創立（東京巨人の前身）	グ選抜野球チーム来日	ベープ・ルースらアメリカ大リーグ選抜野球チーム来日	明者三〇三六人、家屋全半壊四万二千戸	室戸台風大阪に上陸。死者行方不明者三〇三六人、家屋全半壊四万二千戸	東京宝塚劇場が開場	五回をたたかい一〇で明石中を下す
	6・29					11・3	10・31	1・8	
反余・畑一九五反	豪雨による水害（田辺・河原・薪区）、耕地田畑の浸水田八五町八反					大住役場・小学校増改築	木津川グライダー場閉鎖	国鉄京都駅で、列車見送人の跨線橋転落事故発生。圧死七十七人	

昭和8年					昭和7年				
7・11	5・26	3・27	1・30	1・1	12・13	10・3	7・31	5・15	3・1
天野辰夫らと大日本生産党員と	京都大学教授滝川幸辰、文官分限令により休職処分（滝川事件）	日本、国際連盟を脱退	ヒトラー、独首相に就任	日本軍、山海関で中国軍と衝突（山海関事件）	大日本国防婦人会発足	武装移民団の第一陣満州に渡る	ナチス、独第一党となる	海軍古賀中尉ら、犬養首相を射殺（5・15事件）	満州国建国を宣言
8・19	2・20			1・9			12・16	5・14	2・22
中等野球準決勝で中京商、延長二	作家の小林多喜二、特高に逮捕され拷問により死去	所となる	大島三原山で実践女子学校の生徒が投身自殺する。以後自殺の名所となる	大島三原山で実践女子学校の生徒が投身自殺する。以後自殺の名所となる	中等野球準決勝で中京商、延長二	東京日本橋の白木屋で火災。和服の女店員がロープで非難する際裾の乱れを気にして墜落死したため、以後スロースの着用が一般化	東京日本橋の白木屋で火災。和服の女店員がロープで非難する際裾の乱れを気にして墜落死したため、以後スロースの着用が一般化	米の喜劇王チャップリン来日	第一回日本ダービー開催
	11・13	8・7	6・18	6・17		12・1	7・31	7・12	7・8
	大礼記念京都美術館完成	綴喜防犯協会結成	巨椋池干拓工事起工式	国鉄片町線四條畷～木津間にガソリン・カー運行		国鉄片町線片町～四條畷間電化完成	山城地方豪雨	田辺小学校校舎・講堂増改築、運動場拡張	山城地方豪雨
									京都放送局開局
									府道枚方田辺線拡張
									4・16

昭和13年	昭和12年
1・16	11・25 日独防共協定成立
	12・12 蔣介石、西安の張学良に監禁される(西安事件)
	7・7 盧溝橋で日中両軍衝突(盧溝橋事件)
	8・13 日中戦争始まる
	8・21 海軍陸戦隊、上海で中国軍と交戦開始(第二次上海事変)
	8・24 中ソ不可侵条約調印
	11・6 政府、国民精神総動員実施要綱を決定
	12・13 伊、日独防共協定に参加
	12・16 日本軍南京を占領。南京大虐殺事件を起こす
3・1	2・11 文化勲章が制定される
	4・6 朝日新聞社機神風号、立川を出発。4・10ロンドン着、亜欧連絡新記録(最長時間)を樹立
	4・15 ヘレン・ケラー女史、横浜に到着。
	5・1 約一か月間奇跡の声で各地を講演
	7・3 西宮球場が開場
	8・1 東京・浅草に国際劇場が開場
	9・11 明治座で冷房開始
	12・26 後楽園球場が開場
3・1	2・11 愛国行進曲演奏発表会が開かれる
4・18	2・1 綿糸布配給統制規則公布(最初の切符制)
4・18	2・1 京都人民戦線事件
	4・16 ガソリンなどの不足により、薪自動車三台が京都に登場
	6・16 田辺青果市場開場
	8・14 大雨、河川氾濫
	8・16 田辺町出征軍人後援会結成
	9・16 宇治火薬製造所爆発
	9・16 大住郵便局(郵便取扱所)開局

昭和11年	
8・1	破棄、再軍備宣言 中国共産党、抗日救国統一戦線を提唱(8・1宣言)
8・12	陸軍省軍務局長永田鉄山、皇道派の相沢陸軍中佐に斬殺される
1・15	ロンドン海軍軍縮会議脱会を通告
2・26	歩兵第1・3連隊などの皇道派青年将校、蔵相高橋是清、内大臣齋藤実らを殺害、国家改造を要求(2・26事件)
3・9	広田内閣の馬場蔵相、公債漸減主義放棄・増税・低金利政策などの断行を表明(馬場財政)
5・18	広田内閣、軍部大臣現役武官制を復活。内閣への軍部の影響力増大
8・7	五相(首・外・蔵・陸・海)会議で、国策の基準を決定
10・25	独・伊間でローマ・ベルリン枢軸結成
6・9	吉岡隆徳、一〇〇mで一〇秒三の世界タイ記録。(暁の超特急と呼ばれる)
9月	第一回芥川賞、直木賞を発表
12・1	初の年賀使用切手発行
2・9	プロ野球初の実験試合が行われる
5・18	阿部定、東京尾久の待合で情夫を殺害。下腹部を切り取って逃亡
7・10	初の国立公園切手(富士箱根)が発行される
11・7	帝国議会新議事堂(現在の国会議事堂)落成
1年	女性のマフラー、男児のセーラー服が流行する
8・10	豪雨による水害(浸水家屋、全町を通じ一五〇戸)
9・1	普賢寺村実業青年学校と改称
9・15	奈良電、寺田野球場開場
2・5	山城地方大雪
6・29	大降雨
8・10	大水害
9・20	奈良電、寺田ラグビー場開場
10月	田辺軍友会結成
11月	三山木小学校全校舎改築

昭和 16 年									
3・30	6・14	7・26	8・15	9・23	9・27	10・12	4・13	4・16	7・2
汪兆銘、南京に中華民国政府を樹立	独軍、パリに無血入城	政府、基本国策要綱を決定。大東亜新秩序建設と国防国家体制の確立を明記	民政党解党（全政党建党）	日本軍、北部仏印へ武力進駐開始	日独伊三国同盟締結	大政翼賛会結成	日ソ中立条約調印	政府、日米諒解案を交渉の基礎として日米交渉の正式開始を決定	独軍、ソ連攻撃開始（独ソ戦始まる）
8・1	9・11	10・31	10・31	11・2	11・3		1・8	3・1	5・8
6・15東京・大阪でも実施	東京府、食堂・料理屋などでの米食使用を禁止	内務省、町内会・部落会などの設置を通達（隣組の組織化）	外国名の煙草の改名を発表	東京のダンスホール閉鎖	大日本帝国国民服令公布	厚生省、一〇人以上の子をもつ優良多子家庭を表彰	陸相東条英機、戦陣訓を示達。捕虜となるよりは自ら死を選ぶことを正当化	国民学校令公布（小学校から国民学校に改名される）	6大都市で、米穀配給通帳制・外食券制が実施される
6・18	7・26	9・2	11・26				4・1	4・19	6月
豪雨で淀川大增水	大住村教育後援会結成	（一4日）宇治・乙訓・久世・綴喜・相楽五郡の防空訓練実施	関西電気株式会社、京都電灯株式会社となる				町村立の小学校名を国民学校に改称。	大住村青少年団結式	奈良電バス、新田辺〜国鉄玉水間運行開始
なる								山城地方水害	京阪バス、八幡〜田辺間運行開始
								台風により木津川出水	巨椋池干拓工事完工

昭和 14 年									
3・13	4・1	7・11	10・27	5・11	5・22	8・23	9・1	12・22	2・2
独、オーストリアを併合	国家総動員法公布（5・15施行）	ソ連沿海州国境の張鼓峰で、日ソ両軍武力衝突（張鼓峰事件）	日本軍、武漢三鎮を占領	満州と外蒙との国境付近のノモンハンで、外蒙軍と満州国軍とが武力衝突	独伊軍事同盟調印	独ソ不可侵条約調印	独、ポーランドに進攻開始（第二次世界大戦）	駐日米大使グレー、日米通商航海条約などの締結を拒否	民政党の斎藤隆夫、衆議院で軍部の戦争政策を批判して問題化（反軍演説事件）
4・10	6・11	7・15	8・16	12・26	1・15	2・16	4・12	6・16	5・13
灯火管制規則が実施される。	エノケン一座、日劇に初出演	東京オリンピック中止が決定	ヒトラー・ユーゲントが来日	北海道帝大の中谷宇吉郎ら、雪の人工結晶に成功	六九連勝の横綱双葉山、安芸ノ海に敗れる	不要鉄製品の回収を開始	米穀配給統制法公布	国民精神総動員委員会、生活刷新案を決定	朝鮮総督府、朝鮮人の氏名を日本式に改めるように指示（創氏改名）
4・29	7・4	7・29	8・1	8・22		2・25			
大住村自治制発布五〇周年記念式典	（一6日）山城・丹波大水害	府、全国に先駆け警防団結成	（一2日）山城地方大豪雨	綴喜郡園芸出荷組合設立		大住の大字松井小字川田地内に陸軍機墜落、宝蔵寺中将以下六名死亡	大住郵便取扱所、無集配郵便局と		

昭和20年									
10・24	10・25	11・24		2・4	2・16	3・9	3・14	3・17	7・17
レイテ沖海戦始まる。連合艦隊は事実上壊滅状態となる	海軍神風特攻隊、レイテ沖で米艦船に体当たり	マリアナ基地のB29約七〇機、東京を初空襲。以後、日本本土各地への爆撃が本格化		ルーズベルト・チャーチル・スターリン、ヤルタ会談開催	米機動部隊、硫黄島上陸作戦開始。	三三四機のB29、東京を空襲（東京大空襲）	硫黄島の日本軍守備隊玉砕	大阪大空襲	米軍、沖縄本島に上陸開始
4・20	6・23	8・4	8・28	11・1	3・6	3・18	6・18	7・11	8・20
東京都内の幼稚園、無期限休園となる	北海道洞爺湖畔で大噴火、新火山が生まれる（昭和火山）。	学童集団疎開第一陣が上野を出発	各官庁、第一・第三日曜日出勤となる	煙草の隣組配給制実施	国民動労動員令公布。労働力の根こそぎ動員	政府、決戦教育措置要綱で、国民学校初等科以外の授業を一年間停止	沖縄戦での集団自決が相次ぐ	主食の配給が一割減の二合一勺となる	灯火管制が解除される
6・5	2・24	7・30					7・月	9・17	9・月
午前8時40分ころ、B29爆撃機、木津川へ墜落	宇治市大久保の日本国際航空に空襲。	奈良電沿線など府下各地で空襲（三山木駅踏切警手一名殉職、田辺車庫内車両二両被弾）	奈良電、木津川水泳場休場	西日本に枕崎台風	アメリカ軍、京都・奈良に進駐（19日）府下全域に水害	戦後初の府会開かれる			

昭和19年									
8・25	7・18	6・19	6・6	6・4	2・21	1・7		12・24	11・28
連合軍、パリに入城	東条内閣総辞職	マリアナ沖海戦始まる	連合軍、ノルマンジー上陸	米・英軍、ローマ入城	兼任。軍政両面で独裁体制確立	大本営、インパール作戦を認可	東条首相（陸相兼任）、参謀総長を兼任。軍政両面で独裁体制確立	徴兵適齢臨時特例公布。適齢を一年引下げ一九歳とする	石、カイロ会談開催
3・6		3・4	2・10	1・26				12・10	10・21
全国の新聞、夕刊を廃止	で整理する	宝塚歌劇団、この日かぎりで休演のためファンが殺到、警官が抜刀で整理する	郎ら俳優座を結成	内務省、東京・名古屋に疎開命令	青山杉作・東野英治郎・小沢栄太	政府、二七職業（一般事務補助・電話交換手・車掌など）の男子就業を禁止	出陣学徒の壮行大会、神宮外苑競技場で挙行される	文部省、学童の縁故疎開を促進	
11・25	10・30	10・7	5・月	1・月	1・20				
奈良電バス、新田辺→玉水駅前バス運行開始	（18日）降雨のため木津川増水	奈良電バス、三山木→打田間にバス運行開始	大干ばつ	三山木村農業会設立	町道尊延寺大住線着工				

昭和21 年					
7・26	米・英・中の、ポツダム宣言発表	9・20	文部省、中等学校以下の教科書の戦時教材の削除を通達。墨で教科書を塗りつぶす	12・21	京阪丹波橋駅を奈良電鉄と共用駅とする
8・6	広島に原爆投下				
8・8	ソ連、日本に宣戦布告				
8・9	長崎に原爆投下	10・9	G H Q、東京の五大新聞の事前検閲開始	12・31	飯岡対岸の木津川原で火薬焼却中に爆発する
8・15	日本、無条件降伏し、第二次世界大戦終わる	10・11	戦後企画映画第一作「そよ風」封切り。主題歌の「りんごの歌」が大流行する		
9・2	米艦ミズーリ号艦上で降伏文書に調印		治安維持法など廃止		
9・27	天皇、マッカーサーを訪問	10・13			
10・2	G H Q(連合国総司令部)、執務開始				
1・1	天皇、神格化を否定する詔書(人間宣言)	1・19	ラジオのど自慢素人音楽会放送開始	5・1	山城地方水害
4・10	戦後初の総選挙			7・1	日赤第一病院田辺診療所できる
5・3	極東国際軍事裁判開廷(東京裁判)	2・17	新円発行のため、預貯金封鎖の金融緊急措置令公布	10・1	奈良電。木津川臨時駅廃止
11・3	日本国憲法公布	5・1	十一年ぶりのメーデー開催		

編集後記

住民のみなさんから原稿の募集を始めてから約一年。やっと、発行にこぎつけることができました。募集開始当初は、応募していただく方も少なく、「これでホンマに文集できるやろか」「PRの方法が良くなかったのかな」とか、いろいろ思い悩みましたが、町政協力員の方々や多くのみなさんのご協力で、次第に原稿も集まりました。

この文集の編集を担当した田辺町平和都市推進協議会事務局の職員は、多くは戦争を経験したこのない世代で、戦争と関わりがあったみなさんのそれぞれの人生を、深い感慨をもって読ませていただきました。また「酒保」(用語解説編参照)という言葉を知ったのも、この編集の過程でした。苦しく長い道のりを文章にしていたくのは、大変つらい作業だったと思います。その文章に込められている二度と繰り返してはならない戦争、平和への熱い願いを受けとめ、そして次代へ語り継ぐ橋渡しをするのが私たちの責務だと痛感しました。

戦争体験文や写真を提供していただいたみなさん、ありがとうございました。

参 考 資 料

- 「昭和ってなんだ大百科」(昭和時代資料研究会) KKロングセラーズ
「昭和史 その遺産と負債」(江藤淳) 朝日出版
「昭和史年表」(神田文人) 小学館
「戦争・事変 全戦争・クーデター・事変総覧」教育社
「現代史カレンダー 戦争と平和の366日」(吉田裕・伊藤悟ほか) 東研出版
「昭和世相史」(原田勝正) 小学館
「太平洋戦争の歴史 上・下」(黒羽清隆) 講談社
「暮らしの中の太平洋戦争」(山中恒) 岩波新書
「目で見える昭和の60年 上巻」読売新聞社
「昭和日本史」暁教育図書出版
「日本の侵略…中国・朝鮮」(黒羽清隆・梶村秀樹) ほるぷ出版

語り継ぐ戦争体験

—— 平和への祈りをこめて ——

発行 平成四年八月一日

編集 京都府綴喜郡田辺町平和都市推進協議会

戦争体験文集刊行委員会

発行 京都府綴喜郡田辺町平和都市推進協議会

〒六一〇—〇三 京都府綴喜郡田辺町大字

田辺小字田辺八〇番地

電話 〇七七四六—三—一一二二

印刷

サンケイ総合印刷株式会社